「徐霞客遊記」訳注稿

巻二下　楚遊日記

●崇禎一〇（一六三七）年正月十一日～閏四月七日、一一五日間　徐霞客五十二歳

＊「楚遊日記」は長文なので、（1）正月、（2）二月、（3）三月一日～二十日、（4）三月二十一日～三十日、（5）四月、（6）閏四月、の六部に分けた。各部内も、適宜分割した。

楚遊日記（1）

●崇禎一〇（一六三七）年正月十一日～三十日、二〇日間　徐霞客五十二歳

●凡例

・**■本文の**部では、一定の日ごとに区切り、本文を掲げ、**●校勘**を施す。

・**■訳注の部**では、一定の日ごとに区切り、さらに内容上のまとまりでも区切り、**●訓訳**、**●語注**、**●口語訳**の順で記す。

・本文は、褚紹唐・呉王寿整理の上海古籍出版社本（一九八〇年（「上海新整理本」と略）とする。

・本文について、底本である季本にはなく乾隆刊本にある部分、季本より乾隆本が詳しい部分を［　］で示している。

・訳注では、［　］を外し、本文に組み込んで訳す。

・徐霞客の自注は［　］で示す。

・口語訳においては、本文中では［自注1］などと記し、文末に［自注1］の内容を別記する。

参照文献等（「　」は略称）

◇訳注には諸書を参照する。

・朱恵栄等訳注『徐霞客遊記全訳』貴州人民出版社、一九九七年（「朱恵栄」）

・黄珅訳注『新譯徐霞客遊記』三民書局、二〇〇二年（「黄珅」）

◇参考文献

・『大明一統志』天順五年（一四六一）
　巻之六十三長沙府、巻之六十四衡州府、巻之六十五永州府、巻之六十六郴州府

・李元度撰『重修　南嶽志』光緒九年（一八八三）（「南嶽志」）

・王開運等修『（湖南）清泉縣志』同治八年（一八六九）（「清泉県志」）

・『中華人民共和国地名詞典　湖南省』一九九二年（「地名湖南」）

・譚民政著『陪徐霞客游湖南』湖南文芸出版社、二〇一七年（「譚民政」）
　楚游日記における徐霞客の足跡を追って現況を報告するもの。写真多数。

・任国瑞・謝武経著『湖南的明朝與當代―徐霞客《楚游日記》考察記』方志出版社、二〇一八年（「任国瑞」）
　楚游日記における徐霞客の足跡を追って現況を報告するとともに、楚游日記の校注と口語訳を行ったもの。校注と口語訳は、ほぼ朱恵栄を踏襲する。写真多数。

◇参考地図

○徐霞客地図

・丁文江撰『徐霞客游記二十卷』付図、上海商務印書館、一九二八年（「丁本付図」）

・褚紹唐主編『徐霞客旅行路線考察図集』中国地図出版社、一九九一年（「路線図」）

○外邦図（陸軍参謀本部陸地測量部製作）

・「長沙」五十万分一（「長沙」図）、「衡州」五十万分一（「衡州」図）

・「衡山県」十万分一（十「衡山県」図）、「攸縣」五万分一（「攸県」図）

・「南灣」五万分一（「南湾」図）、「草市」五万分一（「草市」図）、
　「衡山県」五万分一（「衡山県」図）、「呉集」五万分一（「呉集」図）
　「南嶽市」五万分一（「南嶽志」図）、「白果市」五万分一（「白果市」図）
　「樟木市」五万分一（「樟木市」図）、「衡陽城」五万分一（「衡陽城」図）

○現代地図

・湖南省地図集編纂委員会『湖南省地図集』湖南地図出版社、二〇〇〇年（「大地図」）

・中国地図出版社『湖南省地図冊』中国地図出版社、二〇〇一年（「小地図１」）

・湖南地図出版社『湖南省地図冊』湖南省地図出版社、二〇〇八年（「小地図２」）

●訳注稿

第一部　雲陽山・麻葉洞を探訪し衡山県城へ（一月十一日～二十日）

［一月十一日］

《概要》湖広長沙府茶陵州域の、芳子樹下を出発。静聞には荷物を持たせ、舟行で衡州府治に先行させ、自身は顧僕を伴って、茶陵・攸の山々と南岳衡山探訪へ。陸行。西へ、高隴、沙口を経て、雲嶁山探訪。舟行で西へ下り、茶陵州近くの東江口で上陸し、泊。

■本文の部

丁丑正月十一日

是日立春、天色開霽。亟飯、托靜聞隨行李從舟順流至衡州、期十七日會於衡之草橋塔下。命顧僕以輕裝從陸探茶陵攸縣之山。及出門、雨霏霏下。渡溪南涯、隨流西行。已而溪折西北、逾一崗、共三里、復與溪遇。是爲高隴。於是仍逾溪北、再越兩崗、共五里、至盤龍菴。有小溪北自龍頭山來、越溪西去、是爲巫江、乃茶陵大道；隨山順流轉南去、是爲小江口、乃雲嶁山道。二道分於盤龍菴前。〔小江口即蟠龍・巫江二溪北自龍頭至此、南入黄雩大溪者。〕雲嶁山者、在茶陵東五十里沙江之上、其山深峭。神廟初、孤舟大師開山建刹、遂成叢林。今孤舟物故、兩年前虎從寺側攫一僧去、於是僧徒星散、豺虎晝行、山田盡蕪、佛宇空寂、人無入者。毎從人問津、俱戒莫入。〔且雨霧沈霾、莫爲引導。〕余不爲阻、從盤龍小路、〔南沿小溪二里、復與大溪遇。〕南渡小溪入山、雨沈沈益甚。從山夾小路西南二里、有大溪自北來、直逼山下、〔盤曲山峽、兩旁石崖、水齧成磯。〕沿之二里、是爲沙江、即雲嶁之水入大溪處。途遇一人持傘將遠〔出〕、見余問道、輒曰：「此路非多人不可入、余當返家爲君前驅。」余感其意、因隨至其家。其人爲余覓三人、各持械賫火、冒雨入山。初隨溪口東入〔一里〕、望〔一小溪自〕西峽〔透隙出〕、石崖層亙、外束如門。導者曰：「此虎窟也。從來燒采之夫俱不敢入。」時雨勢漸盛、遂溯大溪入、宛轉二里、〔溪底石峙如平臺、中剖一道、水由石間下、甚爲麗觀。〕於是上山、轉山嘴而下、得平疇一壑、名爲和尚園。〔四面重峯環合。平疇盡、〕約一里、復逾一小山、循前溪上流宛轉峽中、又一里而雲嶁寺在焉。山深霧黑、寂無一人、殿上金仙雲冷、廚中丹竈烟空。徘徊久之、雨愈催行、遂同導者出。出溪口、導者望見一舟、亟呼而附焉。順流飛槳、舟行甚疾。余衣履沾濕・氣寒砭肌、惟炙衣之不暇、無暇問兩旁崖石也。山谿紆曲、下午登舟、約四十里而暮、舟人夜行三十里、泊於東江口。

■訳注の部

●訓訳

丁丑正月十一日

是の日立春なり、天色霽(はれ)を開く。亟(すみ)やかに飯し、靜聞に託して行李を隨へて舟に從ひて流れに順ひて衡州に至らしむ。十七日に衡の草橋塔の下にて會せんことを期す。顧僕に命じて輕裝を以て陸に從ひ、茶陵・攸縣の山を探らんとす。

門を出づるに及び、雨霏霏として下る。溪を南涯に渡り、流れに隨ひて西に行く。已に

して溪は西北に折れ、一崗を逾ゆ。共にすること三里、復た溪と遇ふ、是れ高隴たり。ここにおいて仍ほ溪を逾えて北し、再び兩崗を越え、共にすること五里にして、盤龍菴に至る。

小溪の北のかた龍頭山より來る有り、溪を越えて西に去る、是れ巫江たり。乃ち茶陵の大道なり。山に隨ひ流れに順ひて南に轉じて去る、是れ小江口たり。乃ち雲嶁山の道なり。二道盤龍菴の前に分る。小江口は即ち蟠龍・巫江二溪の北のかた龍頭より此に至りて、南して黄雩大溪に入る者なり。

雲嶁山は、茶陵の東五十里の沙江の上に有り。其の山深峭なり。神廟の初め、孤舟大師山を開き刹を建て、遂に叢林を成す。今孤舟物故す。兩年前虎寺側より一僧を攫ひて去る。ここにおいて僧徒星散し、豺虎晝に行く。山田盡く蕪れ、佛宇空寂として、人の入る者無し。

人に從ひて津を問ふ毎に、俱に入る莫かれと戒む。且つ雨霧沈霾として、引導をなす莫し。余阻と爲さず、盤龍の小路に從ふ。南して小溪に沿ふこと二里にして、復た大溪と遇ふ。南し小溪を渡りて山に入る。雨沈沈として益々甚し。

山夾の小路に從ひて西南に二里にして、大溪の北より來る有り。直ちに山下に逼りて、山峽を盤曲す。兩旁の石崖、水齧みて磯を成す。之に沿ふこと二里、是れ沙江たり。即ち雲嶁の水の大溪に入るの處なり。

途に一人の傘を持して將に遠出せんとするに遇ふ。余の道を問ふを見て、輒ち曰く「此の路は多人に非ざれば入るべからず。余當に家に返りて君のために前驅すべし」と。余其の意に感じ、因りて隨ひて其の家に至る。其の人余のために三人を覓め、各々械を持ち火を賚して、雨を冒して山に入る。

初めは溪口に隨ひて東に入ること一里、一小溪の西峽より隙を透して出づるを見る。石崖層亙として、外の束せること門の如し。導者曰く「此れ虎の窟なり。從來燒采の夫も俱に敢へて入らず」と。時に雨勢漸く盛なり、遂に大溪を遡して入る。宛轉たること二里、溪底の石に峙すること平臺の如し。中に一道を剖き、水石間より下る。甚だ麗觀たり。ここにおいて山に上り、山嘴を轉じて而して下り、平疇一壑を得。名は和尚園たり。四面重峯環合す。平疇盡き、約一里にして、復た一小山を逾え、前溪の上流に循ひ峽中を宛轉とし、又た一里にして雲嶁寺焉に在り。

山深く霧黑く、寂として一人無し。殿上の金仙は雲冷たりて、廚中の丹竈は烟空し。徘徊すること之を久しくす、雨愈々行くを催す。遂に導者と同に出づ。

溪口を出づるに、導者一舟を望見し、亟に呼びて焉に附す。流れに順ひて槳を飛ばし、舟の行くこと甚だ疾し。余が衣履は沾濕し、氣寒肌を砭す。惟だ衣を炙るに暇あらず、兩旁の崖石を問ふに暇無し。山谿紆曲す。下午に舟に登り、約四十里にして暮る。舟人夜行すること三十里にして、東江口に泊す。

●語注

○丁丑　西暦一六三七年にあたる。前日、茶陵州の芳子樹下に泊していた。

○十七日　十一日に静聞と別れ、衡州で再会したのは十七日後の二十九日である。ただ、ここは一月十七日の再会を期したのかもしれない。黄珅は「約十七日間」、任国瑞は「一月十七日」とする。

○衡州　衡州府。府治は衡陽。
○茶陵　茶陵州。明代は長沙府に属した。今の珠州市茶陵県。
○攸縣　明代は長沙府に属した。今の珠州市攸県。
○高隴　今の茶陵県高隴鎮。「長沙」図に高隴、「地名湖南」茶陵県に高隴鎮を記載する。
○雲嶁山　諸注に記事無し。譚民政では、不明であった寺院や田の迹を見つけたという（二〇～二三頁「尋找“消失”的雲嶁山」）。
○神廟　万暦帝（在位、一五七二～一六二〇）の廟号である神宗を指す。
○山峽　山に挟まれた峡谷、やまあい。
○械　器具、道具、武器。
○賚　齎に同じ。携える。
○平疇　平らな田畑。
○山嘴　山背。山脚の伸びた突端。
○和尚園　先にあった「山田」で、寺の所有になる耕作地であろう。
○金仙　仏。仏像が残っていたのであろうか。あるいは、仏の姿を想像しているのかもしれない。
○東江口　茶陵州城の東端の河口だろう。
○附　搭乗する。

●口語訳

［湖広長沙府茶陵州域］

丁丑の年

［正月十一日］

《1》芳子樹下から雲嶁山へ

この日は立春である。空模様は晴れてきた。急いで朝食を取り、静聞に荷物を託して舟行で衡州まで下らせる。十七日後に衡州の草橋塔の下で再会する約束をする。私は顧僕に命じて軽装で陸路をたどり、茶陵州と攸県の山岳を探訪することとした。

町の城門を出たところで、雨が霏霏として、しきりに降ってきた。

渓流を渡って南の涯に上がり、流れに沿って西に進む。ほどなく渓流は西北に折れ、道は一座の崗を通過する。さらに平行すること三里で、再び道は渓流と遭遇した。ここが高隴鎮である。ここで道はさらに渓流を北に渡って北に進み、また二座の崗を通過、五里平行して進んで、盤龍菴に至った。

北の龍頭山より流れてくる小さな渓流がある。主たる渓流を越えて、更に西に流れ去っている、これが巫江である。これがすなわち茶陵へ向かう大道である。また山勢に従って流れのままに南へ転じて去る流れがある。これが小江口である。これが雲嶁山へ向かう道である。このふたつの道は盤龍菴の前で分岐する。小江口は、蟠龍・巫江という二筋の渓流が北の方の龍頭山からこの地に流れてきて、さらに南に流れて黄雩大渓に入るところである。

《2》雲嶁山探訪

雲嶁山は、茶陵州の東五十里の、沙江のほとりにある。その山は深く険しい。万暦年間のはじめごろ、孤舟大師という人物が山を開き寺を建て、遂に寺院伽藍を形成した。とこ

ろが今や孤舟大師は亡くなってしまった。二年前、老虎が寺の傍らから僧侶を一人さらって行ってしまった。そこで雲嶲寺の僧徒たちはみな逃散してしまい、今や狼や虎が昼間でも横行するありさまである。寺の所有であった山田も荒れ果て、伽藍は空寂としていて、中に入ろうとする人もいない。

私がへの道を尋ねると、どの人も山に入っては行けないと戒めるのであった。くわえて雨や霧が深く立ちこめており、案内を引き受けてくれる人はいなかった。しかし私はそうした状況にも阻まれず、盤龍菴の小路に従って進んだ。南に進み、小さな渓流に沿って二里進むと、再び大きな渓流と遭遇した。さらに南に下って小さな渓流を渡り、雲嶲山に入った。雨が益々激しく降ってきた。

山に夾まれた小路に沿って西南に二里進むと、北から流れてくる大きな渓流があった。それは真っ直ぐに山麓に迫り、山の峡谷をくねくねと曲がりながら流れている。渓流の両岸の石の崖は、水流に浸食されて、礫岩に覆われた磯（岩だらけの水辺）を形成している。この流れに沿って二里進む。この河は沙江である。つまり雲嶲山からの流れが大渓に入る場所である。

途上で、傘を持ってこれから外出しようとしている人に出会った。私が道を尋ねると、すぐにこう言った。「このあたりはたくさんの人と一緒でないと入ってはいけません。私は家に帰り、あなたのために先導してご案内しましょう」と。私は彼の申し出に大いに感謝し、そこで彼について彼の家に行った。その人は私のために三人を雇ってくれた。彼らはみな武器を身につけ、松明を持ち、雨をものともせず山に入ることになった。

山に入ると、渓流に沿って東に一里進む。一筋の渓流が西の渓谷の隙間からしみ出しているのが見えた。石の崖が層を成しており、外側は門のように狭まっている。案内人が言うには「これは虎の棲処である。従来から炭焼きも薪拾いも決してここには入らないのだ」と。

時に雨勢が次第に盛んになってきた。さらに大渓を遡って行く。二里ほどくねくねと曲がると、渓流の底に、石が平台のように向かいあっているものがあった。その中を一筋の道が通っており、水が石の間を流れ下っている。とても麗しい景観である。ここで山を上り、山のでばなを回って下り、平らな田畑のある谷地に出た。ここは和尚園という。四方を重なる峯々に囲まれている。田畑が尽きるところから、およそ一里、さらに一座の小山を逾え、前にであった渓流の上流にそって渓谷をまがりくねって進み、さらにまた一里で雲嶲寺い至った。

この地は山の奥深く、霧が黒くたちこめ、寂として一人の姿も無い。寺院の殿上の如来像は冷たい雲気にさらされており、厨房の竈からも一筋の烟も出ていない。しばらくあたりをうろうろとしたが、雨がいよいよ激しくなり、帰るように促された。かくしてようやく案内人たちとともに寺から退出した。

《3》舟航で茶陵州まで

渓流の入口に出てみると、案内人が、舟が遠くにいるのを見つけた。急いで呼びかけこれに乗ることになる。急流に乗り、さらに櫂を飛ばすように使うので、舟はとても早く進む。私の衣服も履き物もびっしょりと濡れ、寒気が肌を刺すようである。しかし、衣服を乾かす暇も無く、両岸の崖や石についてこれは何かと質問する暇もない。渓谷も渓流もうねうねと曲がりくねっている。午後に舟に乗ったが、約四十里進んだところで暮れてきた。

船頭はさらに三十里夜行し、茶陵州手前の東江口で宿泊した。

［一月十二日］

《概要》茶陵州城を経由して、東の霊巖八景を探訪。山中の寺に泊。

■本文の部

十二日

曉寒甚。舟人由江口挽舟入酃水、遂循茶陵城過東城、泊於南關。入關、抵州前、將出大西門、尋紫雲・雲陽之勝。聞靈巖在南關外十五里、乃飲於市、復出南門、渡酃水。時微雨飄揚、朔風寒甚。東南行、陂陀高下五里、得平疇、是曰歐江。有溪自東南來、遂溯之行、霧中望見其東山石突兀、心覺其異。又五里、抵山嘴溪上、是曰沙陂、以溪中有陂也。〔溪源在東四十里百丈潭。〕陂之上、其山最高者、曰會仙寨、其内穹崖裂洞、曰學堂巖。再東、山峽盤亙、中曰石梁巖、即在沙陂之上、余不知也。又東一里、乃北入峽中。一里、得碧泉巖・對獅巖、俱南向。又東逾嶺而下、轉而北、則靈巖在焉。以東向、曾守［名才漢］又名爲月到巖云。

自會仙巖而東、其山皆不甚高、俱石崖盤亙、堆環成壑、或三面迴環如玦者、或兩對疊如門者、或高峙成巖、或中空如洞者、每每而是。但石質粗而色赤、無透漏潤澤之觀、而石梁横跨、而下穹然、此中八景、當爲第一。

靈巖者、其洞東向、前有亙崖、南北迴環、其深數十丈、高數丈餘、中有金仙、外列門戸而不至於頂、洞形固不爲洞揜也、爲唐陳光問讀書處。陳居嚴塘［在洞北二十里］、其後裔猶有讀書巖中者。

觀音現像、伏獅峯之東、廻崖上有石跡成像、赭黄其色。

對獅巖者、一名小靈巖、在靈巖南嶺之外。南對獅峯、上下兩層、上層大而高穹、下層小而雙峙。

碧泉巖者、在對獅之西、亦南向、洞深三丈、高一丈餘。内有泉一縷、自洞壁半崖滴下、下有石盤承之、清冽異常、亦小洞間一名泉也。

伏虎巖、在清泉之後。

石梁巖、在沙陂會仙寨東谷。其谷亂崖分亙、攢列成塢、兩轉而東西横亙、下開一竇、中穹若梁、由梁下北望、別有天地、透梁而入、梁上復開崖一層、由東陂而上、直造梁中而止、登之如踐層樓矣。

會仙寨、下臨沙溪、上亙圓頂、如疊磨然、獨出衆山、羅洪山［羅名其綸、瓊司理］、結淨藍於下、即六空上人所棲也。［其師號涵虔。］

學堂巖、在會仙之北、高崖間迸開一竇、云仙人授學之處。

此靈巖八景也。

余至靈巖、風雨不收。先過碧泉・對獅二巖、而後入靈巖、曉霞留飯、已下午矣。適有一僧至、詢爲前山淨侶六空也。時曉霞方理諸俗務［結茆・喂猪］、飯罷、即托六空爲導。廻途至獅峯而睹觀音現像、抵沙陂而入遊石梁、入其菴、而乘暮登會仙、探學堂、八景惟伏虎未至。是日雨仍空濛、而竟不妨遊、六空之力也。晚即宿其方丈。

■訳注の部

●訓訳

十二日

曉、寒きこと甚し。舟人江口より舟を挽き酈水に入る。遂に茶陵城に循ひて東城を過ぎ、南關に泊す。

關に入り、州前に抵り、將に大西門を出でて、紫雲雲陽の勝を尋ねんとす。靈巖南關の外十五里に在りと聞き、乃ち市に飲みて、復た南門を出で、酈水を渡る。時に微雨飄揚として、朔風寒きこと甚し。東南に行く、陂陀高下すること五里にして、平疇を得、是を歐江と曰ふ。溪の東南より來る有り、遂に之に溯して行く、霧中に其の東の山に石の突兀たるを望見す、心に其の異を覺る。又た五里にして、山嘴の溪上なるに抵る、是を沙陂と曰ふ、溪中に陂有るを以てなり。溪の源は東四十里の百丈潭に在り。陂の上の、其の山の最も高き者を、會仙寨と曰ふ。其の内は穹せる崖や裂せる洞あり、學堂巖と曰ふ。再び東し、山峽盤亙たり、中を石梁巖と曰ふ、即ち沙陂の上に在り、余知らざるなり。

又た東に一里にして、乃ち北して峽中に入る。一里にして、碧泉巖・對獅巖を得。俱に南向す。又た東して嶺を逾えて下り、轉じて北すれば、則ち靈巖焉に在り。東向するを以て、曾守［名は才漢なり］又た名して月到巖と為すと云ふ。

會仙巖より東、其の山皆甚しくは高からず、俱に石崖盤亙として、堆し環りて壑を成す、或は三面迴環すること玦の如き者あり、或は兩對疊すること門の如き者あり、或は高く峙して巖を成し、或は中空なること洞の如き者あり、毎毎にして是なり。但だ石質は粗にして色は赤く、透漏潤澤の觀無し、而して石梁横跨し、而して下は穹然たり、此の中に八景、當に第一たるべし。

靈巖なる者は、其の洞は東向す。前に亙崖有り、南北迴環し、其の深さ數十丈、高さ數丈餘なり。中に金仙有り。外には門戸を列するも頂には至らず。洞の形は固くして洞揜をなさず。唐陳光問の書を讀むの處たり。陳は嚴塘［洞の北二十里に在り］に居る。其の後裔に猶ほ書を巖中に読む者有り。

觀音の現像、伏獅峯の東、廻崖の上に石跡の像を成す有り、赭黄たる其の色。

對獅巖は、一名小靈巖なり、靈巖南嶺の外に在り。南のかた獅峯に対す、上下兩層にして、上層は大にして高穹し、下層は小にして雙峙す。

碧泉巖は、對獅の西に在り、亦た南向す、洞は深さ三丈、高さ一丈餘。内に泉一縷有り、洞壁の半崖より滴下す、下に石盤の之を承くる有り、清冽なること常に異なり、亦た小洞の間に一名泉あるなり。

伏虎巖は、清泉の後ろに在り。

石梁巖は、沙陂會仙寨の東谷に在り。其の谷は亂崖分亙し、攢列して塢を成す、兩たび轉じて東西に横亙し、下に一竇を開く、中は穹すること梁の若く、梁の下より北に望めば、別に天地有るなり、梁を透して入る、梁上に復た崖一層を開く、東陂よりして上れば、直ちに梁中に造りて止む、之を登ること層樓を踐むが如し。

會仙寨は、下沙溪に臨む、上亙の圓頂は、疊の磨然たるが如し、獨り衆山より出づ、羅洪山［羅の名は其綸、瓊の司理なり］、淨藍を下に結ぶ、即り六空上人の棲む所なり［其の師の號は涵虔なり］。

學堂巖は、會仙の北に在り、高崖の間に一竇を迸開す、仙人の學を授くるの處と云ふ。
此れ靈巖八景なり。
余靈巖に至るに、風雨收まらず。先ず碧泉・對獅の二巖を過ぎ、後に靈巖に入る。曉霞留め飯せしむ。已に下午なり。適々一僧の至る有り、詢ふに前山淨侶六空たり。時に曉霞方に諸俗務を理む［其の師の號は涵虔なり］。飯し罷り、即ち六空に託して導となす。途を廻らして獅峯に至り觀音現像を睹る。沙陂に抵りて入りて石梁に遊び、其の菴に入る、而して暮に乘じて會仙に登り、學堂を探る。八景は惟だ伏虎のみ未だ至らず。是の日雨ふること仍りに空濛たり、而して竟に遊を妨げざるは、六空の力なり。晩、即ち其の方丈に宿す。

●語注

○紫雲　茶陵州城の西にある山。徐霞客は一月十三日に探索している。
○雲陽　雲陽山。「大明一統志」巻六三長沙府山川に「〔雲陽山〕在茶縣西一十五里。上有七峯。曰、偃霞・紫微・石柱・白蓮・隱形・正陽・石耳。又有百靈關・眞仙洞・玉華洞・赤松壇・般若巖之類」とある。徐霞客は一月十四日から十七日にかけて探索している。
○靈巖　茶陵州城の東十五里にある山。靈岩八景がある。
○會仙寨　譚民政（二四頁）に写真がある。
○石梁巖　譚民政（二六頁）・任国瑞（三頁）に写真がある。
○陂陀　傾斜して平らでない。
○毎毎　往々にして。どこでも
○洞揜　揜は覆う。洞穴内の壁を二次生成物などが覆っていることを指すか。
○陳光問　唐昭宗天復元（九〇一）及第。その数年後の天祐四（九〇七）年に唐は滅亡。陳は故郷に帰って二度と出仕しなかった。
○嚴塘　「地名湖南」茶陵県に、嚴塘鎮を記載する。
○羅洪山　茶陵の人で、万暦の挙人。
○淨藍　仏寺。
○學堂巖　譚民政（二五頁）に写真がある。
○前山　目の前の山。すなわち、全体としての靈巖。
○淨侶　僧侶。
○茅　黄に同じ。茅の若芽。
○喂　飼育する。

●口語訳

［十二日］

《4》茶陵州城から靈巖へ

暁、とても寒い。船頭が江口から舟を引いてきて酈水に入った。さらに茶陵の州城にそって進み東城を経過し、南關に停泊した（ここで上陸）。
南関をくぐり、州の役所の前に至った。ここから大西門を出て、西の方、紫雲雲陽の名勝を尋ねようと考えた。ところが、靈巖という名勝が、南關の外十五里にあると聞いた。そこで、まず市場へ行って、元気づけに酒を飲み、再び南関の門をくぐって外へ出て、酈

水を渡って東へ進む。

時に小雨が舞い降り、北風が吹き付けてとても寒い。東南に進み、坂道を上り下りすること五里で、平坦な土地に出た。ここにある河を欧江という。東南の方角から流れてくる渓流がある。そこでこれを遡及して進む。すると霧の中から、東方の山に石が高く聳えるのが見えてきた。非常にふしぎな気持ちがした。

《5》霊巌探訪

また五里進み、渓流のほとりに山脈の突端が至っているところに出会った。これを沙陂という。渓流の中に坂があるからこういう名がついた。この渓流の源は東四十里の百丈潭である。坂の上の、最も高いところが会仙寨である。会仙寨の内側にはカーブをなすドーム状の崖や裂け目をなす洞穴がある。それを学堂巌という。ここから更に東に進むと、山峡がくねくねとしている。その中を石梁巌という。ここは沙陂の上にあたったのだが、そのとき私は気がつかなかった。

更に又た東に一里進み、そこで北にまがって峡谷の中に入る。一里で、碧泉巌と対獅巌に至る。この二洞はともに洞口が南向きである。さらに又た東に進み、嶺を越えて下り、北に進路を転ずれば、靈巌がある。この洞穴は、東向なので、曾守［自注1］が、月到巌という名をつけたといわれている。

会仙巌より東側は、どの山もそれほど高くはない。すべて石崖が曲がりつながっていて、堆積してめぐり、谷を形成している。三面が囲われていて一面だけ欠けていてちょうど「玦」のようなものがあり、両側から向かい合っていて門のような形のものがあり、高く聳える岩が対峙しているものもあり、洞穴のように中が空いているものがある。どこもかしこもこのような感じである。但だ石の質は粗で色は赤く、水気がしみ出して湿潤であるような景観はない。そこに石梁が横ざまに跨がり、その下部は穹然と曲がっている。こうした景観の中で、次にあげる八景が第一の景勝といえるだろう。

●霊巌八景

〈一〉霊巌　霊巌は、洞口は東向きである。洞前に連続する崖があり、南北に廻っている。洞の深さは数十丈、高さは数丈余ある。洞の中には仏像がある。洞の外には門戸のような小さな穴が並んでいるが、岩の頂には至っていない。洞内の壁は固く乾いており、鍾乳石のような二次生成物に覆われてはいない。唐の時代に陳光問が書を読んだところである。陳は厳塘［自注2］を住まいとしていた。陳の後裔で、今もなお洞穴で書を読んでいるものがいる。

〈二〉観音現像　自然の観音像は、伏獅峯の東、廻る崖の上に石が自然に観音様の姿をなしたもの。像の顔色は、赤と黄色が混ざった様子。

〈三〉対獅巌　対獅巌は、一名小霊巌ともいう。霊巌の南嶺の外にある。南の方は獅峯に相対している。上下二層あり、上層の洞は大きくまた高くドームを成している。下層の洞は小さいが、ふたつの洞が対峙している。

〈四〉碧泉巌　碧泉巌は、対獅巌の西にある。この洞もまた南向きである。洞穴は、深さ三丈、高さ一丈余。洞内に一筋の湧き水がある。洞穴の壁の半ばからしたたり落ちており、その下に水滴を承ける石盤がある。その水の清冽さは、他とは大いに異なるものがある。さらにまた、小さな洞の間に別の湧き水がある。

〈五〉伏虎巌　伏虎巌は、清泉（碧泉巌）の後ろにある。

〈六〉石梁巖　石梁巖は、沙陂や会仙寨のある東谷にある。この谷には乱立する山崖が分かれたりつながったりしていて、集まり並んで山塢を形成している。さらに東西に分岐して、その下にひとつの穴を開く。岩の中ばは梁のようにアーチ状をなしており、その梁の下から北を望むと、そこに別天地が広がっているのが見える。梁をくぐってそこに入る。梁の上には復た一層の崖が開けている。東の坂道から登れば、そのまま梁の中に至る。これを登るのは、幾層もの楼閣を踏み登るようである。

〈七〉会仙寨　会仙寨は、沙渓を見下ろす。（そのあたりは、）峯の頂はつながっていて、重ね磨いたようであるが、ただ会仙寨のみは、多くの峯々から突出している。羅洪山［自注3］が寺院をその麓に営んだ。これが六空上人が棲んでいるところである［自注4］。

〈八〉学堂巖　学堂巖は、会仙寨の北にある。高い崖の間に一穴を吹き出している。仙人が学を授けたところと伝える。

これが霊巖八景である。

私が霊巖に至るころ、風雨は治まらなかった。先ず碧泉巖と対獅巖の二巖を訪ね、次に霊巖に入った。そこで僧侶の暁霞和尚が留めて飯を出してくれた。そのころは既に午後になっていた。するとちょうど一人の僧侶がやって来た。聞くとこの山の六空上人という僧侶であった。その時、暁霞和尚は寺の諸雑務［自注5］を司っていた（ので多忙であった）。そこで食事を終えると、六空上人にお願いして、案内してもらうこととした。道をめぐりながら、獅峯に至り、さらに観音現像を見た。さらに沙陂に至り、石梁にも入って遊行し、六空上人の菴で休憩した。さらに暮になったがものともせず会仙寨に登り、学堂巖を探訪した。八景の中で、ただ伏虎巖のみが未踏で、その他の七景は全て訪ねることができた。この日は、雨が降り続け小雨がけぶっている状態が続いていたが、そうした天候の中で遊行をさまたげられず実行できたのは、ひとえに六空上人のおかげである。日が暮れ、六空上人の方丈に宿泊した。

［自注1］諱は才漢である。

［自注2］洞の北二十里にあった。

［自注3］羅の名は其綸、瓊州の司理であった。

［自注4］彼の師匠の號は涵虔である。

［自注5］茅を結ったり、豚を飼ったりしていた。

［一月十三日］

《概要》茶陵州城へ引き返し、そのまま通過。紫山麓の沙江鋪（不詳）を経て、紫霞山・雲陽山に入り、探訪（十五日まで）。赤松壇の菴に泊。

地脈の考察を行っており、徐霞客の堪輿家的視点が注目される。また、場所による樹氷のでき方の違いを考察。地元民の方言による聞き間違いも確認している。

■本文の部

十三日

晨餐後寒甚、陰翳如故。別六空、仍舊路西北行。三里至歐江、北入山、爲茶陵向來道；南沿沙陂江西去、又一道也。過歐江、溪勝小舟、西北過二小嶺、仍渡茶陵南關外、沿城溯江、經大西門、〔尋紫雲・雲陽諸勝。〕西行三里、過橋開隴、始見大江自東北來。於是越黄土坳、又三里、過新橋、霧中始露雲陽半面。又三里、抵紫雲山麓、是爲沙江鋪、大江至此直逼山下。由沙江鋪西行、爲攸縣・安仁大道。南登山、是爲紫雲仙。上一里、至山半爲眞武殿、上有觀音菴、俱東北瞰來水。觀音菴松巖、老僧也。予詢雲陽道、松巖曰：「雲陽山者、在紫雲西十里。其頂爲老君巖；雲陽仙在其東峯之脅、去頂三里；赤松壇又在雲陽仙之麓、去雲陽仙三里。蓋紫雲爲雲陽盡處、而赤松爲雲陽正東之麓。由紫雲之下、北順江岸西行三里、爲洪山廟、乃登頂之北道；由紫雲之下、南循山麓西行四里、爲赤松壇、乃登頂之東道；去頂各十里而近。二道之中有羅漢洞、在紫雲之西、即由觀音菴側小徑横過一里、可達其菴。由菴登頂、亦有間道可達、不必下紫雲也。」

余從之。遂由眞武殿側、西北度兩小坳、一澗從西北來、則紫雲與青蓮菴〔即羅漢仙〕後山夾而成者。〔水北入大江、紫雲爲所界斷。〕渡澗即青蓮菴、東向而出、地幽而菴淨。僧號六澗、亦依依近人、堅留余飯、余亟於登嶺、遂從菴後西向登山。其時濃霧猶翳山半、余不顧、攀躋直上三里、逾峯脊二重、足之所上、霧亦旋開。又上二里、則峯脊冰塊滿枝、寒氣所結、大者如拳、小者如蛋、依枝而成、遇風而墜、俱堆積滿地。其時本峯霧氣全消、山之南東二面、歷歷可睹、而北西二面、猶半爲霾掩、〔酈江自東南、黄雩江自西北、盤曲甚遠。〕始知雲陽之峯、俱自西南走東北、排疊數重：紫雲、其北面第一重也；青蓮菴之後、余所由躋者、第二重也；雲陽仙、第三重也；老君巖在其上、是爲絶頂、所謂七十一峯之主也。雲峯在南、余所登峯在北、兩峯横列、脈從雲陽仙之下度坳而起峙、爲余所登第二重之頂、東走而下、由青蓮菴而東、結爲茶陵州治。余既登第二重絶頂、徑路迷絶、西南望雲峯絶頂、中隔一塢、而絶頂尚霾夙霧中。俯瞰過脊處、在峯下里許。其上隔山竹樹一壑、兩乳迴環掩映、若天開洞府、即雲陽仙無疑也。雖無路、亟直墜而下、度脊而上、共二里、逾一小坳、入雲陽仙。其菴北向、登頂之路、由左上五里而至老君巖；下山之路、由右三里而至赤松壇。菴後有大石飛累、駕空透隙、竹樹懸綴、極爲倩疊、石間有止水一泓、澄碧迴異、名曰五雷池、雩祝甚靈；層巖上突、無可攀跨、其上則黑霧密翳矣。蓋第二重之頂、當風無[*1]樹、故冰止隨枝堆積。而菴中山環峯夾、竹樹蒙茸、縈霧成冰、玲瓏滿樹、如瓊花瑤谷、朔風搖之、如步搖玉珮。聲叶金石。偶振墜地、如玉山之頹、有積高二三尺者、途爲之阻。聞其上登跨更難。

時日過下午、聞赤松壇尚在下、而菴僧〔楚〕音、誤爲「石洞」。余意欲登頂右後。遂從頂北下山、恐失石洞之奇、且謂稍遲可冀晴朗也。索飯於菴僧鏡然、遂東下山。路側澗流瀉石間、僧指爲「子房煉丹池」・「搗藥槽」・「仙人指跡」諸勝、乃從赤松而附會留侯也。直下三里抵赤松壇、始知赤松之非石洞也。遂宿菴中。殿頗古、中爲赤松、左黄石、而右子房[*2]。殿前有古樹松一株、無他勝也。僧葛民亦近人。

●校勘

＊1無　黄珅は、下句に「隨枝堆積」とあり、樹木は存在するので「無」はおかしい、「無」は「舞」の誤りではないか、とする。これに従い、訳注では「舞」とする。

＊2子房　底本は「子房殿、前有」と、「殿」を「子房」につなげる。しかし、「赤松」「黄石」には「殿」がつかず、「子房」だけ「殿」というのは不自然であろう。「子房」で句とし、「殿」を後の文につなげ

て読む。

■訳注の部

●訓訳

十三日

晨餐の後寒甚し、陰翳故の如し。六空に別かれ、舊路に仍りて西北に行く。三里にして歐江に至り、北して山に入る、茶陵向來の道たり。南して沙陂江に沿ひて西に去るは、又た一道なり。歐江を渡る、溪は小舟に勝ふ。西北して二小嶺を過ぎ、仍りて茶陵南關外に渡る。城に沿ひて江を溯り、大西門を經す。

西に行くこと三里にして、橋の開隴なるを過ぐ。始めて大江の東北より來るを見る。ここにおいて黄土坳を越ゆ。又た三里にして、新橋を過ぐ。霧中に始めて雲陽の半面露る。又た三里にして、紫雲山麓に抵る。是れ沙江鋪たり。大江此に至りて直ちに山下に逼る。沙江鋪によりて西に行く、攸縣・安仁の大道たり。

南して山に登る。是れ紫雲仙たり。上ること一里にして、山半に至るに眞武殿たり。上に觀音菴あり。俱に東北に來る水を瞰る。觀音菴の松巖は、老僧なり。予雲陽の道を詢ふに、松巖曰く「雲陽山は、紫雲の西十里に在り。其の頂は老君巖たり。雲陽仙は其の東峯の脅たりて、頂を去ること三里なり。赤松壇は又た雲陽仙の麓に在りて、雲陽仙を去ること三里なり。蓋し紫雲は雲陽盡くるの處たりて、而して赤松は雲陽正東の麓たり。紫雲の下よりして、北して江岸に順ひて西に行くこと三里にして、洪山廟たり。乃ち頂に登るの北道なり。紫雲の下よりして、南して山麓に循ひて西に行くこと四里にして、赤松壇たり。乃ち頂に登るの東道たり。頂を去ること各々十里而近なり。二道の中に羅漢洞有り。紫雲の西に在り。即ち觀音菴の側の小徑によりて横過すること一里にして、其の菴に達すべし。菴より頂に登るも、亦た間道の達すべきあり。必ずしも紫雲に下らざるなり」と。

余之に從ふ。遂に眞武殿の側よりして、西北に兩小坳を度る。一澗の西北より來るあり、則ち紫雲と青蓮菴［即ち羅漢仙なり］の後ろの山との夾みて成る者なり。水は北して大江に入る。紫雲界斷するところとなる。澗を渡れば即ち青蓮菴なり。（菴は）東向きにして出で、地は幽、菴は淨なり。僧六澗と號す、亦た依依として人に近づき、堅く余を留め飯せしめんとす。余は登嶺に亟にして、遂に菴の後より西に向かひて山を登る。其の時濃霧猶ほ山半を翳す。余顧ず、攀躋して直ちに三里を上り、峯脊二重を踰え、足の上る所、霧も亦た旋開す。又た上ること二里なれば、則ち峯脊冰塊枝に滿つ。寒氣の結ぶ所にして、大なる者は拳の如く、小なる者は蛋の如し。枝に依りて成り、風に遇ひて墜ち、俱に堆積して地に滿つ。

其の時本峯霧氣全く消え、山の南・東の二面、歴歴として睹るべし。而して北・西の二面は、猶ほ半ばは霾掩せらる。酈江は東南よりし、黄雩江は西北よりす。盤曲すること甚だ遠し。始めて知る、雲陽の峯は、俱に西南より東北に走る、排疊數重なるを。紫雲は、其の北面の第一重なり。青蓮菴の後ろの、余のよりて躋る所の者は、第二重なり。雲陽仙は、第三重なり。老君巖其の上に在り、是れ絶頂たり。所謂「七十一峯」の主なり。雲峯は南に在り、余の登る所の峯は北に在り、兩峯横列す。脈は雲陽仙の下より坳を度りて起峙し、余が登る所の第二重の頂となり、東に走りて下り、青蓮菴よりして東し、結びて茶陵州治と為す。余既に登るの第二重絶頂は、徑路迷絶たり。西南に雲峯の絶頂を望み、中

に一塢を隔つ、而して絶頂は尚ほ霾夙霧中なり。過脊の處を俯瞰するに、峯下里許りに在り。其の上は山を隔てて竹樹の一壑あり、兩乳迴環掩映し、天開の洞府の若し、即ち雲陽仙たること疑ひ無きなり。路無きと雖も、亟に直ちに墜ちて下り、脊を度りて上ること、共に二里、一小坳を踰え、雲陽仙に入る。其の菴は北向す。頂へ登るの路は、左より上ること五里にして老君巖に至り、山を下るの路は、右より三里にして赤松壇に至る。菴に後ろに大石の飛累せるあり、空に駕し隙を透かし、竹樹懸綴す、極めて倩疊をなす。石間に止水一泓有り、澄碧にして迴異なり、名を五雷池と曰ふ。雩祝に甚だ靈あり。層巖上に突し、攀跂すべき無し。其の上は則ち黑霧密翳たり。蓋し第二重の頂は、風に當りて樹舞ひ、故に冰は止だ枝に隨ひて堆積す。而して菴は山の環し峯の夾むに中り、竹樹蒙茸として、縈霧冰を成し、玲瓏樹に滿つること、瓊花瑤谷の如く、朔風之を搖らし、歩搖玉珮の如く、聲金石を吐く。偶々振して地に墜つること、玉山の頽の如く、積高二三尺なる者有り、途之が爲に阻まる。聞く、其その上は登跂更に難しと。

時に日下午を過ぐ、赤松壇尚ほ下に在りと聞くに、菴僧楚音にして、誤りて石洞となす。余が意は頂の右後より登れば、遂に頂の北より下山せんと欲す、石洞の奇を失うを恐る。且つ、「稍々遲くなれば晴朗を冀ふべし」と謂ふ。飯を菴僧の鏡然に索め、遂に東して山を下る。路側の澗流石に瀉するの間、僧指して「子房煉丹池」・「搗藥槽」・「仙人指跡」諸勝を為す、乃ち赤松に從ひて留侯に附會するなり。直ちに下ること三里にして赤松壇に抵る。始めて知る、赤松の石洞に非ざるを。遂に菴中に宿す。殿は頗る古く、中は赤松たり、左は黄石たり、而して右は子房たり。殿前に古樹松一株有り、他勝無きなり。僧の葛民も亦た人に近し。

●語注

○向來　従来。

○經大西門、〔尋紫雲・雲陽諸勝。〕　大西門に続けて「紫雲・雲陽」を述べるのは、十二日条にある。ここは〔　〕を補わないのがよい。

○橋開隴　諸訳本、訳せず。任国瑞は「橋の後ろに畝が開けているところ」と訳する。これに従う。

○眞武殿　真武神は、もと玄武神と呼ばれ、北方七宿星の総称。歴代信仰されたが、特に明代には王室の守護神とされ、全土で盛んに信仰された。

○雲陽仙　道観。譚民政（三五頁）・任国瑞（一六頁）に写真がある。

○脅　脇の下から腰まであたり。中腹と訳す。

○赤松壇・赤松仙　譚民政（四〇頁）・任国瑞（一〇頁）に写真がある。

○而近　以内。

○近人　近は、親しむ、親しくする。親切。

○堅留余飯、余亟於登嶺　徐霞客に食事を振る舞おうとしたようだが、①徐霞客はもてなしを受けたが、先を急ぐのでそそくさと退出した、のか、②先を急ぐのでもてなしを辞退してさっさと退出した、のか。いちおう②で訳した。

○脈　地脈。

○結爲茶陵州治　地脈が結んでいるところは「佳地」である。茶陵の地が、州治としてふさわしいところであると見ているのである。ここには、堪輿家の視点がある。

○五雷池　譚民政（三七頁）・任国瑞（一二頁）に写真がある。
○瓊花瑤谷　晋孫綽「遊天台山賦」に、天台山に神仙世界を見いだしている表現に「瓊臺中天而懸居」「朱闕玲瓏於林間」がある。これをふまえてやや意訳した。
○楚音　湖南方言。
○赤松　赤松子。古代伝説中の仙人。漢代には王朝を守護すると信ぜられた。功臣張良は、王朝成立後、退隠して赤松子に従って神仙となったという。浙江の金華山に彼の石室が有ると伝える。
○子房　漢の張良（？～前一六八？）。字は子房。若い頃、穀山という山で黄石公という神仙から太公望の兵書を授けられたという。そこで身につけた兵法により、劉邦を助けて漢の建国に貢献し、留侯に封建された。

●口語訳

［十三日］

《6》霊巌から茶陵州へ戻る

朝食ののち、とても寒くなった。雲が暗く空を覆っているのは昨日同様である。六空上人に別かれ、前日来た道を逆にたどり西北に行く。三里で欧江に至り、北にまがって山に入る。この道は茶陵から来た以前の道である。ここから南に向かい、沙陂江に沿って西に去る別の道もある。欧江を渡る、渓流は小舟を浮かべるに耐えるだけの水量がある。西北に進み二座の小嶺を過ぎ、茶陵の南關の外に渡る。城壁に沿って江を溯り、大西門を通過する。

《7》雲陽山へ

さらに西に行くこと三里にして、橋とその背後に畝が開けているところを過ぎる。ここに来て始めて東北から大きな川が流れてくるのを見た。かくして黄土坳を越える。又た三里進み、新橋を過ぎる。ここではじめて、霧の中に雲陽山の半面が姿を現した。又た三里で、紫雲山の麓に至る。ここは沙江鋪である。大江はここで真っ直ぐに山の麓に迫る。沙江鋪から西に行く道は、攸縣・安仁に至る大道である。

《8》雲陽山探訪

南に進み山に登る。これは紫雲仙である。上ること一里で、山の半ばに至ると真武殿がある。その上に観音菴がある。どちらの場所からも、東北方面に向かって眺めると、大きな川が流れてくるのが見える。

●松巌和尚が語る雲陽山の概要

観音菴の松巌和尚は、老僧である。私が雲陽への道を尋ねると、次のように答えた。「雲陽山は、紫雲仙の西十里にあたる。その頂には老君巌がある。雲陽仙は雲陽山の東の峯の中腹にあたり、頂から三里の距離である。赤松壇というのも雲陽仙の麓にあり、雲陽仙から三里の距離である。

思うに紫雲山は雲陽山が尽きるところにあたり、赤松壇は雲陽山の真東の麓にある。紫雲仙の下から、北上して江岸に沿って西に三里行くと、洪山廟がある。ここが頂上に登る北道になる。紫雲仙の下から南に進み、山麓に沿いながら西に四里行くと、赤松壇である。ここが頂上に登る東道である。頂上からはどちらも十里以内である。二道の間に羅漢洞がある。紫雲仙の西にあたる。つまり観音菴のそばの小徑を一里ほど横に過ぎると、この菴

（観音菴）に達することができる。観音菴から頂上に登るのにも、到達できる間道がある。紫雲仙から一旦降りる必要はない（今いる観音菴から紫雲仙に下り戻り、洪山廟経由の北道や赤松壇経由の東道を通るという手立てを取る必要はなく、ここから直接山頂へ至ることができる）」と。

●雲陽仙へ、下って赤松壇の菴に泊まる

私はこれに従うことにした。かくして真武殿の側から進み、西北にふたつの小さな窪地を渡る。すると西北から一筋の谷川が流れてきた。これは紫雲山と青蓮菴の［自注1］後ろの山とに挟まれてできたものである。この水は北に流れて大江に入るが、紫雲山を区切るものとなっている。

谷川を渡ると青蓮菴である。菴は東向きに出張っていて、あたりの土地は幽婉で、菴は清浄である。六澗和尚という僧侶がいた。彼もまた親切で、私をそこに留めて食事を提供しようとしてくれた。私は登嶺に心を引かれていたので、ついに菴の後ろから西に向かって山を登り始めた。その時、濃霧がなお山の半分を覆い隠していた。しかし私はそうした事態をも顧みず、登攀を続けて真っ直ぐに三里上り、二重の峯を越えた。足が踏み出すたびに、足下の霧が開けていく。又た二里上ると、峯の背に生える樹木の枝に氷の塊がびっしりとついていた。寒気が凝結したもので、大きいものは拳骨ほど、小さいものは卵くらいである。枝に付着してできて、風に吹かれては地に落ち、堆積しては地面を覆うほどである。

この時、私のいる山峯は霧気が全く消え、山の南と東の二面は、歴歴として目に入った。ただ北と西の二面は、なお半分くらいは霧によって視界がふさがれている。（目に入った景観では）鄱江は東南よりし、黄雩江は西北より流れている。くねくねと湾曲しながら甚だ遠くまで続いている。ここで始めて分かった、雲陽山の峯々は、いずれも西南より東北に走っており、幾重にも重なり並んでいることを。

紫雲山は、北面の第一重である。青蓮菴の後ろで、私が上ってきたものは第二重である。雲陽仙は、第三重である。老君巖がその上にあって、これが絶頂である。所謂「七十一峯」の主峯である。雲峯は南にあって、私が上ってきた峯は北にある。ふたつの峯は横に並ぶ。地脈は雲陽仙の下から窪地を渡って立ち上がり、私が上っている第二重の頂となり、東に走って下り、青蓮菴を経由して東に進み、茶陵州治で結実する。

私が登ってきている第二重の絶頂は、小路が錯綜していてわかりにくい。西南の方角に雲峯の絶頂を望んでみると、そこの中間にひとつの窪地を隔てている。だが絶頂は尚お濃霧につつまれている。山の背が通り過ぎるところを見下ろしてみると、峯の下一里くらいのところがあり、その上は山を隔てて竹樹に覆われた谷があり、両辺が乳房のように隆起してその地を廻り覆っていて、天然の洞府のようなところがあった。これこそ雲陽仙に間違いが無いと思った。そこで路らしき路はない中を、速やかに墜ちるようにして下り、山の脊を渡って上ることさらに二里で、小さな窪地をひとつ越え、雲陽仙に入った。ここの菴は北向きである。

ここから山頂へ登る路は、左より上り、五里にして老君巖に至る。ここから山を下る路は、右より下りて三里にして赤松壇に至る。菴の後ろには飛び上がるような大石が重なっている。空に飛び上がるようであり、石と石との間には空隙がある。石の上には竹樹が懸かり綴っており、積み重なる美しさを極めている。石の間に静止した深い池沼がある。碧

に澄み切っていること尋常に異なるものがある。名を五雷池という。雨乞いに甚だ霊験があるという。ここから上は層をなす巌が上に突出しており、登攀する手立てがないし、上の方は黒々とした霧がたちこめている。

思うに第二重の頂では、風に吹かれて樹木は舞いおどる。だから枝に着した冰は枝の伸びる姿に従って落下して堆積する。しかし菴は山が囲み峯が挟む場所にあたっており、竹樹が鬱蒼と覆っており、まとわりついた霧が冰を形成し、樹木にびっしりと鈴なりになること、玉の花が谷を覆っているかのようである。北風がこれを揺らすと、妙なる響きを鳴らす玉歩揺のように、金石のような清冽な音を奏でる。そしてたまたま揺られて地面に落ちることは、まるで玉の山が崩れるようになり、二三尺も積み重なることがある。このため道が阻まれてしまうこともある。

また、ここから上は、登攀するには更に難しい、ということだった。

その時、既に午後になっていた。そして「赤松壇が下にある」と聞いたのだが、菴の僧は湖南方言がきつくて、「石洞」と聞きまちがえてしまった。私は、頂上の右後から登ってきたので、頂上の北から下山すればよいと考えていた。しかしそうすると「石洞の奇勝」を見損なうのではと心配になった。さらに「もう少しすると天気が晴れるでしょう」とも言われた。（そこで北から下るのではな、東へ下ることにした。）菴僧の鏡然に食事の用意をしてもらい、（喫してから）東へ山を下る。路の側に谷川が流れ、石に注いでいる。その中に、「子房煉丹池」「搗薬槽」「仙人指跡」等の諸勝があることを案内の僧侶が指し示して教えてくれる。つまり赤松子のことに附会して、張子房留侯のことが持ち出されているのだろう。まっすぐに三里下って赤松壇に至る。そこで始めて、「赤松」であって「石洞」ではないことに気づいた。そのままそこの菴に宿泊する。神殿は極めて古く、真ん中に赤松子、左に黄石、右に張子房を祀る。殿前に松の古木が一株あるが、その他には見るべき景勝はない。ここの僧の葛民も、人なつっこく親切である。

［自注１］これが羅漢仙である。

［一月十四日］

《概要》雲陽山探訪。曇天のため、山頂への登頂は断念し、麓を迂回して洪山廟へ回る。洪山廟に泊。

■本文の部

十四日

晨起寒甚、而濃霧複合。先是、晩至赤松、即嘿禱黄石・子房神位、求假半日晴霽、爲登頂之勝。至是望頂濃霾、零雨四灑、遂無復登頂之望。飯後、遂別葛民下山。循山麓北行、逾小澗二重、共四里、過紫雲之麓、江從東北來、從此入峽、路亦隨之。繞出雲陽北麓、又二里、爲洪山廟。風雨交至、遂停廟中、市薪炙衣、煨榾柮者竟日。廟後有大道南登絶頂。時廟下江旁停舟數隻、俱以石尤横甚、不能順流下、屢招予爲明日行、余猶不能恝然於雲陽之頂也。

■訳注の部

●訓訳

十四日

晨に起くるに寒甚し。而して濃霧複た合す。

是より先、晩く赤松に至り、即ち黄石・子房の神位に嘿禱し、半日の晴霽を假り、ために登頂の勝を求む。是に至りて頂を望むに濃霾たりて、零雨四灑たり。遂に復た頂に登るの望み無し。

飯後、遂に葛民に別れ山を下る。山麓に循ひて北に行き、小澗二重を踰ゆ。共に四里にして、紫雲の麓を過ぐ。江の東北より來りて、此より峽に入る。路も亦た之に隨ふ。繞りて雲陽の北麓に出づ。又た二里にして、洪山廟たり。風雨交々至る、遂に廟中に停す。薪を市ひ、衣を炙る。榾柮に煨すること竟日なり。

廟後に大道の南のかた絶頂に登る有り。時に廟下の江旁に停舟數隻あり。俱に石尤の横なること甚しきを以て、流れに順ひて下ること能わざるなり。屢々予を招いて明日の行をなさんとす。余猶ほ雲陽の頂に恝然たる能わざるなり。

●語注

○煨　埋み火の中に埋める。

○榾柮　短く斬った木。ほた、ほだぎ。

○石尤　逆風。石氏の娘が夫の尤郎が行商から帰らないのを悲しみ、「自分は大風となって、夫が遠くへ旅するのを天下の妻達のために阻もう」と言って病死した故事による。

○恝　こだわらない。

●口語訳

［十四日］

●雲陽仙登頂断念

朝起きてみると、とても寒い。そして濃霧がまたあたりに立ちこめている。

これまでは、昨日遅くに赤松廟に到着し、すぐさま黄石公や張子房の位牌に黙祷を捧げ、半日後の明朝の朝、天気がよくなるのを仮託し、私にとって、頂に登って景勝を楽しむことができるようにお願いしていた。しかし、ここへ来て、山頂を望んでみると濃い霧に覆われており、静かに降る細かい雨が、四面に降り注いでいる。山頂へ登る望みは絶たれたのである。

●洪山廟へ

そこで朝食後、葛民に別れて山を下る。山麓に循って北に行き、小澗二重を越える。さらに四里にして、紫雲仙の麓を過ぎる。川が東北から流れてきて、ここで峡谷に入る。路もこの河に沿っている。ぐるっと回って雲陽山の北麓に出る。さらに二里で、洪山廟である。風雨が交じりながらやってくる。しかたなくこの廟に逗留することにする。薪を買って衣を乾かす。ほだぎを埋めた灰の中に、一日中突っ込んでおく。

廟の後ろには南へ向かって絶頂に登る大道がある。この時、廟の下の川岸に数隻の舟が停泊していた。いずれも、逆風がはげしく、流れに沿って川を下ることができないでいる、船頭がしばしば私に声をかけ、明朝舟を利用しないか、と持ちかける。私は、雲陽山の山

頂に未練があり、決することができないでいる。

［一月十五日］

《概要》雲陽山探訪。たいへんな苦労をして雲陽山を縦踏。ほとんど遭難寸前であった。詳細な記述が生々しい。譚民政に、グーグルアースに徐霞客の踏破ルートを書き込んだものがある（四一頁）。新菴に泊。

■本文の部

十五日

晨起、泊舟將放、招余速下舟；予見四山霧霽、遂飯而決策登山。路由廟後南向而登、三里、復有高峯北峙、〔道分兩岐：〕一岐從峯南*1、一岐從峯西南。余初由東南*1行、疑爲前上羅漢峽中舊道、乃向雲陽仙、非逕造老君巖者、乃復轉從西南道。不一里、行高峯西峽、顧僕南望峽頂有石梁飛駕、余瞻眺不及。及西上嶺側、見大江已環其西、大路乃西北下、遂望嶺頭南躋而上。時嶺頭冰葉紛披、雖無徑路、余意即使路訛、可得石梁勝、亦不以爲恨、及至嶺上遍覓、無有飛駕之石、第見是嶺之脊、東南横屬高頂、其爲登頂之路無疑。遂東南度脊、仰首直上、又一里、再逾一脊、則下瞰脊南、雲陽仙已在下方矣。蓋是嶺東西横亙、西爲絶頂北盡處、東即屬於前所登雲陽東第二層之嶺也。於是始得路、更南向登頂、其上冰雪層積、身若從玉樹中行。又一里、連過兩峯、始陟最高頂。是時雖旭日藏輝、而沈霾屏伏、遠近諸峯盡露眞形、惟西北遠峯尚存霧痕一抹。乃從峯脊南下、又一里、復過兩峯、有微路「十」字界峯坳間：南上復登山頂、東由半山直上、西由山半横下。然脊北之頂雖高、而純土無石；脊南之峯較下、而東面石崖高穹、峯筍離立。乃與顧僕置行李坳中、從南嶺之東、攀崖隙而踞石筍、下瞰塢中、有茅一龕、意即老君巖之靜室、所云老主菴者。竊計直墜將及一里、下而復上、其路既遙、況既踞石崖之頂、仰矚俯瞰、勝亦無殊、不若逾脊從西路下、便則爲秦人洞之遊、不便即北去江滸覓舟、順流亦易。乃遂從西路行。

山陰冰雪擁塞、茅棘交縈、舉步漸艱。二里、路絶、四顧皆茅茨、爲冰凍所膠結、上不能舉首、下無從投足、兼茅中自時有堰宕、疑爲虎穴、而山中濃霧四起、瞰眺莫見、計難再下。乃復望山巔而上、冰滑草擁、隨躋隨墜。念嶺峻草被、可脱虎口、益鼓勇直上。二里、復得登頂、北望前西下之脊、又隔二峯矣。其處嶺東茅棘盡焚、嶺西茅棘蔽山、皆以嶺頭路痕爲限、若有分界者。是時嶺西黑霧瀰漫、嶺東日影宣朗、霧欲騰衝而東、風輒驅逐而西、亦若以嶺爲界者。又南一里、再下二峯、嶺忽亂石森列、片片若攢刃交戟、霧西攫其尖、風東搗其膊、人從其中溜足直下、強攀崖踞坐、益覺自豪。念前有路而忽無、既霧而復霧、欲下而轉上、皆山靈未獻此奇、故使浪遊之蹤、迂迴其轍耳。既下石峯、坳中又得「十」字路、於是復西向下嶺、俱從濃霧中行矣。始二里、冰霾而草中有路、又二里、路微而石樹蒙翳；又二里、則石懸樹密而路絶、蓋前路之逾嶺而西、皆茶陵人自東而來、燒山爲炭、至此輒返。過此、崖窮樹益深、上者不能下、下者不復上。余念所下既遙、再下三四里當及山麓、豈能復從前還躋？遂與顧僕掛石投崖、懸藤倒柯、墜空者數層、漸聞水聲遙遙、而終不知去人世遠近。已而霧影忽閃、露出層峯峽谷、樹色深沈。再一閃影、又見谷口兩重外、有平塢可矚。乃益揆叢歴級、若鄧艾之下陰平、墜壑滚崖、技無不殫、然皆赤手、無從裹氈也。既而忽下

一懸崖、忽得枯澗、遂得踐石而行。蓋前之攀枝懸墜者藉樹、而兜衣掛履亦樹、得澗而樹稍爲開。既而澗復生草、草復翳澗、靡草之下、不辨其孰爲石、孰爲水、既難著足。或草盡石出、又棘刺勾芒、兜衣掛履如故。如是三里、下一瀑崖、微見路影在草間、然時隱時現。又一里、澗從崖間破峽而出、兩崖轟峙、而北尤危峭、始見路從南崖逾嶺出。又一里、得北來大道、始有村居、詢其處、爲窰裏、蓋雲陽之西塢也。其地東北轉洪山廟五里而遙、南至東嶺十里而遙、東嶺而南更五里、即秦人洞矣。

時霧影漸開、遂南循山峽行。逾一小嶺、五里、上棗核嶺、〔嶺俱雲陽西向度而北轉成峽者。〕下一里、渡澗、〔澗乃南自龍頭嶺下、出上清洞。〕傍西麓溯澗南上半里、爲絡絲潭、深碧無底、兩崖多疊石。又半里、復度澗、傍東麓登山。是處東爲雲陽之南峯、西爲大嶺之東嶂。〔大嶺高並雲陽、龍頭嶺其過脊也、其東南盡西嶺、東北抵麻葉洞、西北峙五鳳樓、西南爲古爽冲。〕一溪自大嶺之東北來者、乃洪碧山之水；一溪自龍頭嶺北下者、乃大嶺・雲陽過脊處之水。二水合而北出把七［鋪名。］。龍頭嶺水分南北、其南下之水、由東嶺塢合秦人洞水出大羅埠。共二里、越嶺得平疇、是爲東嶺塢。塢内水田平衍、村居稠密、東爲雲陽、西爲大嶺、北即龍頭嶺過脊、南爲東嶺迴環。余始至以爲平地、即下東嶺、而後知猶衆山之上也。循塢東又一里、宿於新菴。

●校勘

＊1　道について、はじめは「南」と「西南」といい、のちには「東南」と「西南」という。「南」か「東南」のどちらかが誤りではないか。任国瑞は「南」で統一する。これに従う。

■訳注の部

●訓訳

十五日

晨に起く。泊舟將に放せんとし、余を招きて速に舟に下らしめんとす。予四山の霧霽（は）るるを見、遂に飯して策を山を登るに決す。

路は廟の後より南に向ひて登る。三里にして、復た高峯の北に峙する有り。道兩岐に分かる。一岐は峯の南に從ひ、一岐は峯の西南に從ふ。余初め東南によりて行く。前に羅漢峽中に上るの舊道たるかと疑へばなり。乃ち雲陽仙に向かふにして、逕の老君巖に造る者に非ざるなり。乃ち復た轉じて西南の道に從ふ。一里ならずして、高峯の西の峽を行くに、顧僕南のかた峽頂に石梁飛駕有るを望む。余瞻眺するに及ばず。西して嶺側に上るに及びて、大江の已に其の西を環り、大路の乃ち西北して下るを見る。遂に嶺頭を望みて南にりて上る。時に嶺頭冰葉紛披たり。徑路無しと雖も、余が意は即し路をして訛せしむるとも、石梁の勝を得べくんば、亦た以て恨みとなさず。嶺上に至るに及び、遍く覓むるも、飛駕の石有ること無し。第だ是の嶺の脊の、東南して高頂に横に屬するを見る。其の頂に登るの路たること疑ひ無し。遂に東南して脊を度る。首を仰いで直ちに上ること、又た一里にして、再び一脊を踰ゆ。則ち下のかた脊南を瞰る、雲陽仙已に下方に在り。

蓋し是の嶺は東西に横亙す。西は絶頂北に盡くるの處たり、東は即ち前に登る所の雲陽東第二層の嶺に屬するなり。

ここにおいて始めて路を得、更に南に向ひて頂に登る。其の上は冰雪層積し、身は玉樹の中に從ひて行くが如し。又た一里にして、兩峯を連過し、始めて最高頂に陟る。是の時

旭日輝を藏すと雖も、而も沈霾屏伏し、遠近の諸峯盡く眞形を露す。惟だ西北の遠峯のみ尚ほ霧痕一抹を存す。

乃ち峯脊より南に下り、又た一里にして、復た兩峯を過ぐ。微路の「十」の字にして峯坳の間を界する有り。南に上れば復た山頂に登り、東は半山より直ちに上り、西は山半より横に下る。然るに脊北の頂は高しと雖も、而も純土にして石無し。脊南の峯は較々下にして、而も東面の石崖は高穹にして、峯筍離れ立つ。

乃ち顧僕と行李を坳中に置き、南嶺の東より、崖隙を攀して石筍に踞す。下塢中を瞰るに、茅一龕有り、意ふに即ち老君巖の靜室ならん。云ふ所の老主菴なる者なり。竊に計るに、直ちに墜つれば將に一里に及ばんとす、下りて復た上れば、其の路既に遙かなり。況んや既に石崖の頂に踞するにして、仰矚俯瞰し、勝も亦た殊なる無し。脊を踰へて西路より下るに若かず。便なれば則ち秦人洞の遊をなし、便ならざれば即ち北のかた江滸に去りて舟を覓めて流れに順へば、亦た易からん。乃ち遂に西路より行く。

山陰は冰雪擁塞し、茅棘交々縈ひ、歩を舉ぐること漸く艱し。二里にして、路絶ゆ。四顧するも皆茅茨にして、冰凍の膠結する所となる。上は首を舉ぐる能わず、下はよりて足を投ずる無し。兼ぬるに茅中に自時堰宕有り、疑ふらくは虎穴ならん。而して山中濃霧四起し、瞰眺見ゆる莫し。計るに再び下り難し。乃ち復た山巔を望みて上る。冰は滑り草は擁ぎ、隨ひて躋れば隨ひて墜つ。嶺は峻にして草被へば、虎口を脱すべしと念ひ、益々勇を鼓して直ちに上る。二里にして、復た頂に登るを得。

北のかた前に西に下るの脊を望むに、又た二峯を隔つ。其の處、嶺東の茅棘は盡く焚し、嶺西の茅棘は山を蔽ふ。皆に嶺頭の路痕を以て限りと爲すこと、分界有る者の若し。是の時、嶺西は黑霧瀰漫たりて、嶺東は日影宣朗なり。霧の騰衝して東せんと欲するも、風輒ち驅逐して西す。亦た嶺を以て界となす者の若し。

又た南に一里、再び二峯を下る。嶺忽ち亂石森列し、片片として刃を攢し戟を交ふるが若し。霧は西に其の尖を攫み、風は東に其の膊を搗き、人は其の中より足を溜らせて直ちに下る。強ひて崖に攀じて踞坐し、益々自ら豪なるを覺る。前に路有りて忽として無く、既に霧ありて復た霧あり、下らんと欲して上るに轉ずるを念ず、皆山靈未だ此の奇を獻ぜず、故に浪遊の蹤をして、其の轍を迂迴せしむるのみ。

既に石峯を下れば、坳中に又た「十」字の路を得。ここにおいて復た西に向ひて嶺を下る。倶に濃霧の中より行くなり。始めの二里は、冰霾なるも草中に路有り、又た二里は、路微にして石樹蒙翳たり。又た二里は、則ち石は懸にして樹は密にして路絶ゆ。蓋し前路の嶺を逾して西するは、皆な茶陵人の東より來りて、山を燒きて炭を爲り、此に至りて輒ち返るなり。此を過ぐれば、崖は窮り樹は益々深く、上る者は下る能はず、下る者は復た上らず。余念ふ、下る所は既に遙かにして、再び下ること三四里なれば當に山麓に及ぶべし。豈に能く復た前に從ひて還り躋らんや、と。遂に顧僕と石を掛け崖に投じ、藤に懸して柯に倒し空に墜つること數層にして、漸く水聲の遙遙たるを聞く。而して終に人世を去ることの遠近を知らず。已にして霧影忽として閃き、層峯峽谷露出し、樹色深沈たり。再び影を一閃し、又た谷口の兩重の外に平塢の矚るべき有るを見る。

乃ち益々叢を揆り、級を歴すること、鄧艾の陰平を下るが若くす。壑を墜ち崖を滾るに、技として殫さざるは無し、然れども皆赤手にしえ、從ひ裹つ氈無きなり。既にして忽として一懸崖を下り、忽として枯澗を得。遂に石を踐みて行くを得。蓋し前の枝を攀じ懸

墜する者は樹に藉る、而して衣を兜(か)け、履を掛くるも亦た樹なり。澗を得て樹稍開けりとなす。既にして澗にも復た草を生じ、草復た澗を翳(おほ)ふ。靡草の下、其の孰れか石たりて、孰れか水たるかを辨ぜず。既にして足を著け難く、或は草盡きて石出づれば、又た棘刺勾芒、衣を兜け履を掛くること故の如し。

是の如きこと三里にして、一瀑崖に下る。微に見る路影の草間に在るを。然れども時に隱れ時に現る。又た一里にして、澗の崖間より峽を破りて出で、兩崖轟峙す。而して北尤も危峭なり。始めて見る、路の南崖より嶺を逾えて出づるを。又た一里にして、北來の大道を得。始めて村居有り、其の處を詢へば、窰裏たり。蓋し雲陽の西塢なり。其の地より東北に轉ずれば洪山廟は五里にして遙かなり。南して東嶺に至るは十里にして遙かなり。東嶺にして南に更に五里にして、即ち秦人洞なり。

時に霧影漸く開け、遂に南のかた山に循ひて峽を行く。一小嶺を踰え、五里にして、棗核嶺に上る。嶺は俱に雲陽より西に向ひて度り而して北に轉じて峽を成す者なり。

下ること一里にして、澗を渡る。澗は乃ち南のかた龍頭嶺より下りて、上清洞に出づるなり。(澗) 傍の西麓を澗を溯りて南に上ること半里にして、絡絲潭たり。深碧にして底無し、兩崖に疊石多し。又た半里にして、復た澗を度る。(澗の) 傍の東麓より山に登る。是の處は、東は雲陽の南峯たり、西は大嶺の東嶂たり。大嶺は高きこと雲陽に並び、龍頭嶺は其の脊を過ぐるものなり。其の東南は西嶺に盡き、東北は麻葉洞に抵り、西北は五鳳樓に峙し、西南は古爽冲となる。一溪の大嶺の東北より來る者あり。乃ち洪碧山の水なり。一溪の龍頭嶺の北より下る者あり、乃ち大嶺・雲陽に脊を過ぐる處の水なり。二水合して而して北して把七［鋪の名なり］に出づ。龍頭嶺の水は南北に分かる。其の南に下るの水は、東嶺塢を由(と)りて秦人洞水と合っして大羅埠に出づ。

共に二里にして、嶺を越えて平疇を得。是れ東嶺塢たり。塢の内は水田平衍にして、村居稠密たり。東は雲陽たり、西は大嶺たり、北は即ち龍頭嶺の脊を過ぐるにして、南は東嶺の迴環するなり。余、始め至るに以て平地となす。即ち東嶺に下りて、而して後知る、猶ほ衆山の上なるを。

塢に循ひて東にた又一里にして、新菴に宿す。

●語注

○紛披　花が数多く咲くさま。
○自時　黄珅は「常」、任国瑞は「本来就不時」と訳す。
○堰宕　堰はせき、ここでは偃か。ふせる。宕は穴。ふせってある穴、か。
○其膊　膊は、二の腕。石の中程か。
○踞坐　座るだが、ここでは、跨ぎ越す、だろう。
○自豪　自分自身で無理なことを実現している、くらいか。
○鄧艾之下陰平　鄧艾は三国魏の武将。蜀を攻める際、毛氈で身をつつみ、険しい摩天嶺を、崖をころがるようにして下り、成都や向かう要衝の地の陰平県に至った。
○兜　ここでは、ひっかく、捉える。
○東嶺塢　譚民政（四七頁）は、東嶺村を訪れ、段家の老屋を確認している（十六日条、四八頁）。

●口語訳

［十五日］

●再び雲陽山探訪

朝、起き出す。停泊していた舟がまさに出帆しようとしており、私を招いて早く舟に乗せようとした。（しかし）私は、四方の山々の霧が晴れているのを見、朝食を取ってから、山に上るという選択肢を選んだ（舟に乗って川を下る選択肢は捨てた）。

●雲陽山の頂へ

路は廟の後ろから南に向う、これを登る。三里で、ふたたび高い峯が北側向かって聳えているのに対面する。道が二手に分かれている。一岐は峯の南を進み、一岐は峯の西南を進む。私ははじめは（東）南の道を選んだ。この道が、以前に羅漢峡中に上るときに辿ったことのある道ではないかと思ったからである。ところがこの道は雲陽仙に向かうもので、老君巌に至る小路ではなかった（ことが分かった）。そこで道を転じて、西南の道を取る。一里行かないうちに、高い峯の西側の峡谷を進んでいるところで、顧僕が南の方の峡の頂に石梁飛駕があるのが見えたという。私は眺めてみたが見当たらない。そこでさらに西に進み、嶺の側に上ると、大江が嶺の西をめぐり、大路が西北へ去っているのが見えた。そこで嶺の頭を望み見ながら、南へ上って行く。その時、嶺の頭では樹氷が花が咲き乱れるようにあたりを覆っていた。径路は見当たらなかったが、たとえ路が無かったとしても、（道なき道を行かなければならないとしても）石梁の景勝を得られるならばそれでよい、と思っていた。嶺の頂きに至り、あたりを見回してみるが、飛駕石は見当たらない。ただこの嶺の背が東南に延びて高い頂に連接しているのが見えた。これが頂に登る路であることは間違いが無いだろうと考えた。そこで東南に進み脊を渡った。首をあげてどんどん上ることまた一里で、再び一つの脊を越える。振り返って背の南を見下ろすと、雲陽仙がすでに下の方になっていた。

思うにこの嶺は東西によこたわっているのだ。西は絶頂が北に伸びて尽きるところであり、東は前に登った雲陽山東側の第二層の嶺に属するものである。

ここへ来て、始めて路を得た。更に南に向って頂へ登る。路の上は氷雪が積み重なっており、体は樹氷に覆われた玉樹の中を進んでいくかのようである。さらにまた一里進み、ふたつの峯を連続して通過し、やっと最高頂に至った。

この時、太陽は光を陰らせていたが、垂れ込めていた霧は静まり消え、遠近の諸峯が尽くその真形を露わにした。ただ西北の遠峯のみ尚お一抹の霧痕をまとっていた。

●山頂での思案

そこで峯脊から南に下り、また一里進み、ふたつの峯を過ぎると、「十」の字をなす小さな小路が、峯と窪地を区切っているところがあった。ここを南に上れば再び山頂に登り、東に行くと山の中腹から真っ直ぐ上る道で、西に行くと山の中腹から横に行って山を下る道だ。ただし、脊の北に伸びた頂は高いけれども土質が泥土で石は無い。脊の南に伸びる峯はやや低い。東面の石崖は高く隆起していて、峯や筍のように尖った切っ先が離れて立っている。

そこで顧僕とともに、荷物は窪地に置いて、南の嶺の東側から、崖の隙間を使いながらよじ登り石筍に腰をおろした。下のほう、盆地を見下ろすと、一軒の茅屋がある。思うに、これこそ老君巌の静室であろう。いわゆる老主菴である。

ここで考えるに、ここからまっすぐ落ちるように下れば、一里ほどである。しかし一旦嶺を下って再び上れば、その路程は遙かに長いものとなる。ましてもう既に石崖の頂におり、あたりを仰ぎ見たり見下ろしたりして、このあたりの景勝は全て見ている。なので山脊を越えて西路から下るのがよかろう。便利ならばそのまま西の秦人洞の探索をすればよいし、もし不便ならば北へ向かって川に出て、そこで舟を求めて流れに沿って下れば、たやすく（秦人洞へ）到達できるだろう、と。かくして西路を取って行く。

●西へ下るも道が途絶、再び山頂へ

山の北側は氷と雪が積み重なって地面を塞いでおり、茅と棘が交互にまとわりついていて、歩行が次第に困難になってくる。二里進むと、路が途絶してしまった。四方をすべて茅茨で囲まれ、氷が凍結して固く結ぼれている。上は頭をあげることもできず、下は足の踏み場も無い。加えて、茅の中に時折ふせった穴がある、どうやら虎の穴らしい。さらに山中とて濃霧が四方から湧き上がり、視界がまったく塞がれてしまった。考えるに、ここから再び下ることは難しいだろうと。そこで再び山頂を望んで上る。地面は氷ですべり、草が進むのをはばみ、一歩上っては一歩滑り落ちるありさま。嶺は険峻だが草が覆っているので、そこへ到達できれば、虎口を脱することができるだろうと念じ、益々勇を鼓してまっすぐ上る。二里で、再び山頂に至ることができた。

●嶺の東西で分かれる景観

北の方へ以前に西に下った脊を眺めると、二つの峯を間にはさんでいる。この場所は、嶺の東側は茅棘が尽く燃やされており、西側は茅棘が山肌を覆っている。どちらも嶺頭の痕跡を限りとしており、まるで境界線が引かれているようである。この時、嶺の西側は黒い霧が垂れ込めており、東側は陽光が明るく輝いていた。西側の霧が立ち上って東へ向かおうとしているが、その都度風が吹き散らして西へ押し返している。この点でもまた、東西で境界線をなしているかのようである。

●困難な嶺頭の歩行

さらに南に一里進み、再び二峯を下る。嶺は忽然として乱雑に石が並び立ち、きれぎれになって刃を集め、戟をぶっ違いにしているかのようである。嶺の西側では霧が尖った石の切っ先をつかむように立ちこめ、東側では風が石の中程に激しく吹き付けている、その中を人（すなわち徐と顧僕）が足を溜らせながらまっすぐ下るのである。無理矢理崖に手をかけてよじ登り跨ぎ越す。益々自分自身無理なことを押し行っていると自覚した。路に出会ったかと思うと忽然と無くなったり、既に霧がかかっているのにさらにまた霧が出てきたり、下ろうとしているのにいつのまにか上っていたことなどがある。これらは皆、山の精霊がこうした奇勝を我々にまだ見せていないため、わざとわれわれの足取りを迂回させて、この素晴らしい景勝を体験させようとしているのであろう。

●道なき道を下る

石峯を下ると、窪地の中にまた「十」字の路があった。この地より再び西に向い、尾根を下る。いずれも濃霧の中を行く。はじめの二里は、氷が靄となっていたが草の中に路があった。次の二里は、石や樹木が覆ってきたが、微かに路はあった。ところが次の二里は、石が空に懸かり、樹木は密生して、路が途絶してしまった。思うに、尾根を越えて西へ進む道は、茶陵の人が東から来て、山を焼き炭を作るために通った道であり、ここまで来て皆茶陵に帰るのであろう。（だからここで道はなくなるのであろう。）ここから先は、崖

は窮り樹木は益々深く、一度上ったら下ることはできず、一度下ったら二度と上ることができない行き止まりだ。

そこで私は考えた、引き返して別の下る道を捜すのは遙かに遠くになってしまった。ここからがんばって三四里下れば、山麓に着くに違いない。どうしてわざわざ引き返し、上ったり下りたりするのがよかろうか、いやそれは選択できない、と。ついに顧僕とともに、石に手を掛け崖に身を投じ、藤蔓にぶら下がったり枝に逆さまにぶら下がったりして、中空を何段も飛び降りたりしていき、ようやく遙かに水音を聞いた。しかし、人世からどのくらい離れているかは分からなかった。ほどなく霧が忽然として一瞬だけ開け、飛び出した峯や峡谷が姿を現し、深く濃い樹木が見えた。さらにふたたび一瞬霧が晴れ、谷の口二重の崖の外に、平坦な窪地が広がっているのが見えた。

そこで草むらの様子を調べながら石段を踏んでいくことは、鄧艾が陰平を下るときのようにした。谷を転げ落ち、崖を転がるのに、できる限りの技を使ったが、素手で抜き身であり、鄧艾のように体をつつむ毛氈があるわけではなかった。夢中で崖を下ると、突然、枯れた谷川に出た。かくして安定した石を踏みながら進むことができた。思うに、これまで枝をつかんでつかまりながら下りてくるのには、樹木の力を借りてきた。しかし、衣服や履き物をつついたりひっかけたりして行動を邪魔をしていたのも樹木であった。谷川に出て、樹木がやや開けてまばらになった。しかし谷川には草が生えいることから、草が谷川を覆っている。はびこる草の下が、はたして石なのか、水なのかが判別つけ難い。足をおろすのが難しいところで、草がつきていて石が露出しているところもあり、そうすると石のとげや出っ張りが、衣服や履き物をつつきひっかけること、樹木に関わった前と同じである。

●ようやく大道に出る

こうしたところを三里進むと、下って瀑布のある崖に出た。草の間に微かに路の痕跡が見える。けれども見えたり、見えなくなったりする。さらに一里進むと、崖の隙間から峡谷を破るようにして流れ出る川に出会う、両岸は壁のように切り立ち向かい合っている。中でも北の崖が最も険しい。南崖から嶺を越えて出て行く道があった。さらに一里進むと、北からやってくる大道に出た。

《9》雲陽山から南部の洞穴へ

●窰裏村から棗核嶺へ

ここで始めて村居があった。聞くと、窰裏村であった。思うにここは雲陽山の西側の窪地なのであろう。この地からより東北に転ずれば、洪山廟までは五里あまりである。南へ東嶺に至るには十里あまりである。東嶺から南に更に五里で、そこが秦人洞である。

その時、霧が次第に開けてき、遂に南の方へ山裾に沿って峡谷を進む。小嶺をひとつ越え、五里進んで、棗核嶺に上る。これら嶺は皆、雲陽から西に延びて来て、北に転じて峡谷を形成するものである。

●絡絲潭から東嶺塢へ

下ること一里で、谷川を渡る。この谷川は、南の方の龍頭嶺から下ってきて、上清洞に出るものである。谷川の傍の山の西麓を、谷川を溯りながら南に半里上ると、絡絲潭である。深碧色で底が見えないほどである。潭の両崖は、石を積み上げたような壁が多くある。

さらに半里でして、復た澗を渡る。今度は谷川の傍の山の東麓より山に登る。この場所

は、東は雲陽の南峯で、西は大嶺の東嶂である。大嶺はその高さは雲陽に並び、龍頭嶺は脊を渡り過ぎるところである。その嶺は東南では西嶺に尽き、東北では麻葉洞に至り、西北では五鳳樓に対峙し、西南では古爽冲となる。

大嶺の東北から流れてくる渓流がある。これは洪碧山からの川である。龍頭嶺の北から流れ下る渓流がある。これは大嶺・雲陽で脊を過ぎるところに発する川である。この二水は合流してさらに北へ流れて把七［自注1］に出る。龍頭嶺に発する川は南北に分かれている。このうち南に下る流れは、東嶺塢を経由して、秦人洞を源とする川と合流して、大羅埠に出る。

さらに二里進み、尾根を越えたところで平地に出た。これが東嶺塢である。盆地の内側は水田が平に広がり、村落が稠密である。ここの東は雲陽山で、西は大嶺である、北はつまり龍頭嶺の脊を過ぎるところで、南は東嶺が繞り囲うところである。

●新菴で泊

私は、この地に至ったはじめは、平地だと思った。しかし、ここから更に東嶺に下ってみた後には、まだ山々の上に位置していることが分かった。

盆地に沿って東にさらに一里進み、新菴に投宿した。

［自注1］鋪の名である。

［一月十六日］

《概要》雲陽山西南の秦人洞探訪。洞内のみならず、洞穴周囲の立地や自然環境などもあわせて観察・考察している。東嶺塢に泊。

■本文の部

十六日

東嶺塢内居人段姓、引。南行一里、登東嶺、即從嶺上西行。嶺頭多漩窩成潭、如釜之仰、釜底俱有穴直下爲井、或深或淺、或不見其底、是爲九十九井。始知是山下皆石骨玲瓏、上透一竅、輒水搗成井。竅之直者、故下墜無底；竅之曲者、故深淺隨之。井雖枯而無水、然一山而隨處皆是、亦一奇也。又西一里、望見西南谷中、四山環繞、漩成一大窩、亦如仰釜、釜之底有澗、澗之東西皆秦人洞也。由灌莽中直下二里、至其處。其澗由西洞出、由東洞入、澗横界窩之中、東西長半里、中流先搗入一穴、旋透穴中東出、即自石峽中行。其峽南北皆石崖壁立、夾成横槽；水由槽中抵東洞、南向搗入洞口。洞有兩門、北向、水先分入小門、透峽下傾、人不能從。稍東而南入大門者、從衆石中漫流。其勢較平；第洞内水匯成潭、深浸洞之兩崖、旁無餘隙可入。循崖則路斷、涉水則底深、惜無浮槎可覓支磯片石。惟小門之水、入峽後亦旁通大洞、其流可揭厲而入。其竅宛轉而披透、其竅中如軒楞別啓、返矚搗入之勢*1、亦甚奇也。西洞洞門東穹、較東洞之高峻少殺；水由洞後東向出、水亦較淺可揭。入洞五六丈、上嵌圜頂、四圍飛石駕空、兩重如庋懸閣、得二丈梯而度其上。其下再入、水亦成潭、深與東洞並、不能入矣。是日導者先至東洞、以水深難入而返、不知所謂西洞也。返五里、飯於導者家、日已午矣。其長詢知洞水深、曰：「誤矣！此入水洞、非水所從出者。」復導予行、始抵西洞。余幸兼收之勝、豈憚往復之煩。既出西洞過東洞、共一里、逾嶺東望、

見東洞水所出處；復一里、南抵塢下、其水東向湧出山麓、亦如黄雩之出石下也。土人環石爲陂、壅爲巨潭以灌山塍。從其東、水南流出谷、路北上逾嶺、共二里始達東嶺之上、此由州入塢之大道也。登嶺、循舊路一里、返宿導者家。

●校勘

＊1返矚搗入之勢　底本は、「搗返觀倒入之勢」とし、校勘記で、乾隆本等では「返矚搗入之勢」に作ると指摘するに留める。黄珅が乾隆本を採用するのに従い、改める。

■訳注の部

●訓訳

十六日

東嶺塢の内の居人、段姓、引す。南に行くこと一里にして、東嶺を登る。即ち嶺上に從ひて西に行くなり。

嶺頭に漩窩の潭を成す多し。釜の仰ぐが如くして、釜底に倶に穴有りて直ちに下りて井をなす。或いは深く或いは淺く、或いは底を見ず、是れ九十九井たり。始めて知る、是の山下皆な石骨玲瓏として、上は一竅を透し、輒ち水搗きて井を成す。竅の直なる者は、故より下り墜ちて底無し。竅の曲れる者は、故より深淺之に隨ふ。井は枯れて水無しと雖も、然れども一山にして隨處皆な是れなり。亦た一奇なり。

又た西に一里にして、西南の谷の中を望見す。四山環繞し、漩して一大窩を成す。亦た仰釜の如し。釜の底に澗有り、澗の東西は皆に秦人洞なり。灌莽中より直ちに下ること二里にして、其の處に至る。其の澗は西洞より出で、東洞より入る。澗は窩の中を横界すること、東西長さ半里なり。中流に先に一穴に搗入し、旋して穴中を透して東に出づるあり。即ち石峽中より行く。

其の峽は南北皆な石崖壁立し、夾みて横槽を成す。水は槽中より東洞に抵り、南に向ひて洞口に搗入す。

洞に兩門有り。北向にして、水先に分かれて小門に入り、峽を透して下り傾く。人從ふ能はず。稍々東にして南に大門に入る者は、衆石の中に從ひて漫流す。其の勢ひ較々平らかなり。第だ洞内は水匯りて潭を成し、深く洞の兩崖を浸し、旁に餘隙の入るべき無し。崖に循はんとすれば則ち路斷ち、水を渉らんとすれば則ち底深し。惜しむらくは浮槎の支磯片石を覓むるべき無きことを。惟だ小門の水は、峽に入りて後に亦た大洞に旁通す。其の流れは厲を揭げて入るべし。其の竅は宛轉として透を披く。其の竅の中は軒楞の別に啓くが如し。返って搗入の勢ひを矚(みる)る。亦た甚だ奇なり。

西洞の洞門は東に穹し、東洞の高峻なるに較ぶれば少しく殺ぐ。水は洞の後より東に向ひて出づ。水も亦た較ぶるに淺く揭ぐべし。洞に入ること五六丈にして、上は圍頂を嵌め、四圍は飛石空に駕す。兩重の庋懸閣の如きあり。二丈の梯を得て其の上に度る。其の下に再び入る。水亦た潭を成す、深きこと東洞と並ぶ。入る能わず。

是の日、導者先に東洞に至り、水の深くして入り難きを以て返る。所謂る西洞を知らざるなり。返ること五里にして、導者の家に飯す。日已に午なり。其の長ふ詢ふ、「洞の水深を知るか」と。曰く「誤れり。此れ入水の洞にして、水の從りて出づる所の者に非ざるなり」と。復た予を導びきて行き、始めて西洞に抵る。余幸ひに之の勝を兼收すれば、豈

に往復の煩を憚らんや。

既に西洞を出でて東洞を過ぐ。共に一里にして、嶺を踰えて登りて東に望む。東洞の水の出づる所の處を見る。復た一里にして、南のかた塢下に抵る。其の水の東に向ひて山麓より湧出すること、亦た黄雩の石下より出づるが如きなり。土人石を環して陂を為り、壅ぎて潭となし、以て山塍に灌す。其の東より、水の南に流れて谷に出づるあり。路は北のかた上りて嶺を踰え、共に二里にして始めて東嶺の上に達す。此れ州より塢に入るの大道なり。嶺に登り、舊路に循ふこと一里にして、返りて導者の家に宿す。

●語注

○九十九井　ポットホール。甌穴。河底や河岸の硬い岩面にできる、たくさんの大きな円形の穴。河床の割れ目が浸食され、渦流により、小石がくぼみの中を転がって円形の穴を拡大させるもの。福建省の九鯉湖が有名。譚民政（四五～四六頁）に記事と写真がある。

○秦人洞　譚民政（東洞口、四三頁）・任国瑞（西洞口、一七頁）。

○庋懸閣　庋は、棚。庋閣で食器棚。黄珅・任国瑞とも「楼閣」とするが、食器棚か？

○得二丈梯　任国瑞は「二丈の梯子があったなら」と仮定で訳す。

○知洞水深　黄珅・任国瑞とも「後に知ることになる洞穴の水深」と訳す。一応、訓訳のように解した。

○山塍　塍は耕地のあぜ道。山上の田地。

●口語訳

［十六日］

●東嶺塢を出発

東嶺塢の住人で段姓の者が、私たちを引導してくれることになった。南に行くこと一里で、東嶺を登る。すなわち嶺の上沿いに西に行くのである。

●九十九井：甌穴

嶺の頭のところに、水流が回旋して甌穴（ポットホール）のできた川が多くある。そのひとつひとつは、仰向けにした釜のようで、釜底が穴を形成してその底に水が溜まる。あるものは深く、あるものは浅く、またあるものは底が無い。これが九十九井である。始めて知った、この山の麓はみな玉石のような岩石でできていて、ひとつひとつの岩は、上部に穴を開き、それぞれに水が打ち付けて甌穴を形成する。比較的真っ直ぐな穴の場合は、水が下り墜ちていて底が無いほど深い。湾曲した穴の場合は、勢いによって深かったり浅かったりしている。今は甌穴は枯れており水が無いが、全山どこもがこういった景観をなしている。これまた一大奇景といえよう。

《10》秦人洞探訪

さらにまた西に一里進み、西南の方角の山谷の中を望見する。谷は四方を群山が取り囲み、グルッと繞って巨大なオープン型の穴を形成している。これもまた仰向けにした釜のようである。釜の底に澗水が流れている。澗水の東西辺はいずれも秦人洞である。生い茂る灌木の中を真っ直ぐに二里下り、くだんの場所に至る。その澗水は秦人洞の西洞から出て、東洞から洞に入る。澗水は窩の中を横切ること、東西に長さ半里である。その中程には流れが一穴に流れ込むのがあり、中で繞って穴を通って東へ出るものもある。それはそ

のまま石の峡谷の中を流れる。
その峡谷は、南側と北側とどちらも石の崖が壁のように切り立ち、南北から夾んで横に長い飼い葉桶の形を形成している。水は飼い葉桶の中を流れて、東洞に至ると、南に向きを変えて洞口に突入する。
洞は二門ある。北向きで、川の水が先で分かれて小さい門に入流入し、峡谷を通過して傾き下って行く。（流れが早いので）人がそのルートを通ることはできない。やや東側に南に向かって大門に入る流れがあるが、こちらは河底に石がたくさんあり、流れがやや緩やかになっている。ただ洞内は水が集まって潭を形成しており、洞の両崖を深く浸しており、洞口との間に身を入れ込む隙間も無い。崖にそって下ろうとすると路が無くなり、水に入って行こうとすれば、底が深く足が届かない。張騫が天の川を渡り支磯片石を求めたときに乗ったという浮槎（いかだ）が無いのが残念である。ただ小さい門から入った水は、峡谷に入った後にまた亦た大洞にも旁通している。その流れもなんとか衣服を着けたまま入れるようだ。ここの穴は曲がっていて流れを披いている。その穴の中に、さらに窓のような穴が啓いている。振り返って、水が突入している形勢を観察する。これもまた甚だ奇勝である。
西洞を出でて、東洞の前を通過する。あわせて一里で、嶺を越えて東を眺める。東洞の水のが出てくる場所が見える。さらに復た一里進み、南の方へ向かって塢の下に至る。東洞の水が、東に向かって山麓から湧出しているさまは、黄雩江が石下から出ているのと似ている。土地の人々が石を廻らせて堤防を造り、水を溜めてため池とし、山の水田を灌漑している。その池の東から、南に流れて谷に出ている小川がある。ここからの路は北の方へ上って嶺を越え、さらに二里で始めて東嶺の上に達する。この道は、茶陵州からこの盆地に入る大道である。

●東嶺塢の導者の家に泊まる

嶺に上がり、往路を引き返すこと一里で、導者の家に帰り着き、ここに宿泊する。

［一月十七日］
＊長文なので、二つに分ける。
〈その一〉
《概要》上清洞探訪。入洞を試みるも、洞口の狭さ、水の冷たさなどで断念。

■本文の部

十七日

晨餐後、仍由新菴北下龍頭嶺、共五里、由舊路至絡絲潭下。先是、余按《志》有「秦人三洞、而上洞惟石門不可入」之文、余既以誤導兼得兩洞、無從覓所謂上洞者。土人曰：「絡絲潭北有上清潭、其門甚隘、水由中出、人不能入、入即有奇勝。此洞與麻葉洞俱神龍蟄處、非惟難入、亦不敢入也。」余聞之、益喜甚。既過絡絲潭、不渡澗、即傍西麓下。〔蓋渡澗爲東麓、雲陽之西也、棗核故道；不渡澗爲西麓、大嶺・洪碧之東也、出把七道。北〕半里、遇樵者、引至上清潭。其洞即在路之下・澗之上、門東向、夾如合掌。水由洞出、有二派：

自洞後者、匯而不流；由洞左者、〔乃洞南旁竇〕其出甚急。既逾洞左急流、即當伏水而入。導者止供炬爇火、無肯爲前驅者。余乃解衣伏水、蛇行以進。石隙既低而復隘、且水沒其大半、必身伏水中、手擎火炬、平出水上、乃得入。西入二丈、隙始高裂丈餘、南北横裂者亦三丈餘、然俱無入處。惟直西一竇、闊尺五、高二尺、而水沒其中者亦尺五、隙之餘水面者、五寸而已。計匍匐水中、必口鼻俱濡水、且以炬探之、貼隙頂而入、猶半爲水漬。時顧僕守衣外洞、若泅水入、誰爲遞炬者？身可由水、炬豈能由水耶？況秦人洞水、余亦曾沒膝浸服、俱温然不覺其寒、而此洞水寒、與谿澗無異。而洞當風口、颼颼彌甚。風與水交逼、而火復爲阻、遂舍之出。出洞、披衣猶覺周身起粟、乃爇火洞門。久之、復循西麓隨水北行、已在棗核嶺之西矣。

■訳注の部

●訓訳

十七日

晨餐の後、仍って新菴より北へ龍頭嶺を下る。共に五里にして、舊路によりて絡絲潭の下に至る。

是れより先、余《志》を按ずるに、「秦人三洞、上洞は惟だ石門にして入るべからず」の文有り。余既に誤導さるるを以て兩洞を兼ね得たり。謂ふ所の上洞なる者を覓むるに從る無し。土人曰く「絡絲潭の北に上清潭有り。其の門は甚だ隘く、水は中より出づるも、人は入る能わず、入れば即ち奇勝有り。此の洞と麻葉洞とは俱に神龍の蟄する處なり。惟に入り難きのみに非ず、亦た敢へて入らざるなり」と。余之を聞き、益々喜ぶこと甚し。

既に絡絲潭を過ぎ、澗を渡らず。即ち西麓に傍して下る。蓋し澗を渡れば東麓たり。雲陽の西なり、棗核の故道なり、澗を渡らざれば西麓たり。大嶺・洪碧の東なり、把七に出づるの道なり。

北に半里にして、樵者に遇ふ。引きて上清潭に至らしむ。

其の洞は即ち路の下、澗の上に在り。門は東に向き、夾して掌を合するが如し。水は洞より出づ。二派有り。洞の後ろよりする者は、匯して流れず。洞の左よりする者は、乃ち洞の南の旁竇にして、其の出づること甚だ急なり。既に洞左の急流を踰ゆれば、即ち當に水に伏して入るべし。導者は炬を供し火を爇(もや)すに止まり、肯へて前驅をなす者無し。余乃ち衣を解きて水に伏し、蛇行して以て進む。石隙は既に低くして復た隘く、且つ水其の大半を没す。必ず身水中に伏し、手に火炬を擎(ささ)げ、水上に平出して、乃ち入るを得。西に入ること二丈にして、隙始めて高く裂くること丈餘なり、南北に横裂する者も亦た三丈餘なり。然れども俱に入る處無し。惟だ直西の一竇は、闊さ尺五、高さ二尺なり。而して水の其の中に没する者も亦た尺五あり。隙の水面に餘する者も、五寸のみ。計るに、水中を匍匐すれば、必ず口鼻俱に水に濡れん。且つ炬を以て之を探らんとすれば、隙の頂に貼して入るべし。猶ほ半ばは水に漬るとなす。時に顧僕は衣を外洞に守る、若し水を泅(およ)ぎて入らば、誰か炬を遞(つた)ふるをなす者ぞや。身は水によるべきも、炬は豈に能く水によらんや。況んや秦人洞の水、余亦た曾て膝を没し服を浸すに、俱に温然として其の寒きを覺えず。而して此の洞の水は寒く、谿澗と異なる無し。而して洞は風口に當たりて、颼颼彌々甚し。風と水と交々逼り、而して火も復た阻を為す。遂に之を舍てて出づ。洞を出で衣を披(ひら)けば、猶ほ周身粟の起るを覺ゆ。乃ち火を洞門に爇く。之を久しくして、復た西麓に循ひて水に

隨ひて北に行く。已に棗核嶺の西に在り。

●語注

○志　「大明一統志」巻六三長沙府山川に「〔秦人三洞〕在茶陵縣南三十里。上洞有石門、不可入。但時聞有鐘磬聲。世傳秦人曽遯迹于此」とある。

○益喜甚　土地の人が、ふたつの洞を神龍がいますところだから入るのはタブーだ、と言うのに対し、そのような人が避けているところこそ、未探索であって、自分が入洞して調べるに値するものだ、と思ったのであろう。

○上清潭　ここにある洞穴が上清洞。

○遞　逓に同じ。ツタ-フ。伝える。

○颼颼　風の音。オノマトペ。

○周身　全身。

○起粟　粟は鳥肌。起粟で、鳥肌が立つ。

●口語訳

［十七日］

《11》上清潭・麻葉洞探訪へ

朝食の後、新菴から北へ龍頭嶺を下る。五里で、以前通った道をたどって絡絲潭の下に至る。

以前、《志》には「秦人三洞、上洞は惟だ石門があるだけで入れない」とあった。私は、昨日誤導されたことをきっかけに、ふたつの洞を訪ねることができた。ここでいう上洞については、どうやって訪ねたらよいのかが分からなかった。土地の人は「絡絲潭の北に上清潭がある。その門は甚だ隘く、水が中から出ているが、人は入れない。入ることができれば奇勝があるはずだ。この上清洞と麻葉洞とは、どちらも神龍がいますところである。ただ入りにくいというのではない、決して入ってはいけないものだ」と。私はこの話を聞いて、とてもうれしくなった。

絡絲潭を過ぎるが、澗を渡らないで、そのまま山の西麓沿いに下る。思うに、澗を渡れば山の東麓である。そこは雲陽山の西であり、棗核嶺へ向かう以前通った道である。澗を渡らないでいれば山の西麓である。ここは、大嶺・洪碧の東であり、把七に出る道である。

北に半里行ったところで、樵者に遇う。彼に案内を依頼して、上清潭に至る。

《12》上清潭探訪

この洞は、路の下、澗の上に位置している。洞門は東に向き、掌を合わせるように両門が覆い被さっている。小川が洞から流れ出している。二筋ある。洞の後ろから出ているものは、そこにわだかまって池をなし、流れ出していない。洞の左から出ているものは、洞の南の支洞をなしていて、その流れは甚だ急である。洞の左の急流を越え、すぐに水中に潜って入洞することができる。

案内人は、松明を提供し、火をつけてくれたが、そこまでで、先に立って入洞し案内するようなことは決してやってくれない。そこで私は衣を脱いで水中に入り、蛇のように身をくねらせて進んだ。しかし、洞の入口の隙間は低いところにあって狭く、加えて入口の大半は水に浸かっている。体全体を水中に潜め、手に持った火炬を水上に出して、そこで

初めて入洞することができそうだ。西に二丈ほど入ると、入口の隙間がようやく高さ一丈あまりに広がってきた。南北にも三丈ばかり横裂している。しかし、いずれにしても身体を入れ込む隙間はない。

真西の支洞は、横に一尺五寸、縦に二尺ばかりである。しかし縦のうち一尺五寸あまりが水中に没しており、水面より上は五寸のみしかない。ここで考えてみるに、水中を匍匐して進めば、きっと口と鼻が両方とも水に濡れてしまうだろう。かつ松明を用いて洞穴を探索しようとするならば、水面との隙間ぎりぎりを洞頂をこするようにして持ち込まなければならない。そして松明の半ばは水に浸かってしまうだろう。その時、顧僕は洞の外で荷物の番をしていた。もし私自身が水に入って泳いでいくならば、誰が松明を私に渡してくれるだろうか。いや渡してくれる人はいない。自分の体は水をくぐることはできるが、松明はどうして水をくぐることができようか。いや、できはしない。まして、秦人洞では、私は膝まで漬かり服も濡れたが、水がわりあいと暖かだったので寒さを感じることはなかったのだが、この上清洞の水は渓流の水とかわらない冷たさであった。さらに洞は風の出入り口となっており、ひゅうひゅう、びゅうびゅうとした風が激しく吹き付けている。風と水とが代わる代わる迫ってきていて、しかも松明の問題も阻害要因となった。ついに入洞をあきらめて、引き返し、洞を出ることにした。

洞を出で衣を開いてみると、寒さ冷たさのために、全身に鳥肌が立っていた。そこで洞門で火を起こし体を暖めた。しばらくして（体も暖まったので）、再び山の西の麓に沿って川の流れに沿って北に進む。ここはもうすでに、棗核嶺の西である。

〈その二〉

《概要》麻葉洞探訪。神怪が棲むとして入洞を止める村人を振り払って探索。洞などの自然に神秘的な力を感じる人々とは一線を画し、自然をあくまでも自然として捉える徐霞客らしさがよく現れている。洞を出て、西北へ陸行し、黄石鋪に泊。

■本文の部

去上清三里、得麻葉洞。洞在麻葉灣、西爲大嶺、南爲洪碧、東爲雲陽・棗核之支、北則棗核西垂。大嶺東轉、東澗下流、夾峙如門、而當門一峯、聳石屼突、爲將軍嶺；澗搗其西、而棗核之支、西至此盡。澗西有石崖南向、環如展翅、東瞰澗中、而大嶺之支、亦東至此盡。廻崖之下、亦開一隙、淺不能入。崖前有小溪、自西而東、經崖前入於大澗。循小溪至崖之西脅亂石間、水窮於下、竅啓於上、即麻葉洞也。洞口南向、大僅如斗、在石隙中轉折數級而下。初覓炬倩導、亦俱以炬應、而無敢導者。曰：「此中有神龍。」或曰：「此中有精怪。非有法術者、不能攝服。」最後以重資覓一人、將脱衣入、問余乃儒者、非羽士、復驚而出曰：「予以爲大師、故欲隨入；若讀書人、余豈能以身殉耶？」余乃過前村、寄行李於其家、與顧僕各持束炬入。時村民之隨至洞口數十人、樵者腰鎌、耕者荷鋤、婦之炊者停爨、織者投杼、童子之牧者、行人之負載者、接踵而至、皆莫能從。

余兩人乃以足先入、歴級轉竇、遞炬而下、數轉至洞底。洞稍寛、可以側身矯首、乃始以炬前向。其東西裂隙、俱無入處、直北有穴、低僅一尺、闊亦如之、然其下甚燥而平。乃先以炬入、後蛇伏以進、背磨腰貼、以身後聳、乃度此内洞之〔第〕一關。其内裂隙既高、東西亦横亙、然亦無入處。又度第二關、其隘與低與前一轍、進法亦如之。既入、内層亦横裂、

其西南裂者不甚深。其東北裂者、上一石坳、忽又縱裂而起、上穹下狹、高不見頂、至此石幻異形、膚理頓換、片竅俱靈。其西北之峽、漸入漸束、内夾一縫、不能容炬。轉從東南之峽、仍下一坳、其底砂石平鋪、如澗底潔溜、第乾燥無水、不特免揭厲、且免沾污也。峽之東南盡處、亂石轟駕、若樓臺層疊、由其隙皆可攀躋而上。其上石竇一縷、直透洞頂、光由隙中下射、若明星鉤月、可望而不可摘也。層石之下、澗底南通、覆石低壓、高僅尺許；此必前通洞外、澗所從入者、第不知昔何以湧流、今何以枯洞也、不可解矣。由層石下北循澗底入、其隘甚低、與外二關相似。稍從其西攀上一石隙、北轉而東、若度鞍歷嶠。兩壁石質石色、光瑩欲滴、垂柱倒蓮、紋若鏤雕、形欲飛舞。東下一級、復値澗底、已轉入隘關之内矣。於是闢成一衒、闊有二丈、高有丈五、覆石平如布幄、澗底坦若周行。北馳半里、下有一石、庋出如榻楞邊勻整；其上則蓮花下垂、連絡成幃、結成寶蓋、四圍垂幔、大與榻並、中圓透盤空、上穹爲頂；其後西壁、玉柱圓豎、或大或小、不一其形、而色皆瑩白、紋皆刻鏤：此衒中第一奇也。又直北半里、洞分上下兩層、澗底由東北去、上洞由西北登。時余所賚火炬已去其七、恐歸途莫辨、乃由前道數轉而穿二隘關、抵透光處、炬恰盡矣。穿竅而出、恍若脱胎易世。

洞外守視者、又增數十人、見余輩皆頂額、稱異、以爲大法術人。且云：「前久候以爲必墮異吻、故余輩欲入不敢、欲去不能。茲安然無恙、非神靈攝服、安能得此！」余各謝之、曰：「吾守吾常、吾探吾勝耳、煩諸君久佇、何以致之！」然其洞但入處多隘、其中潔淨乾燥、余所見洞、俱莫能及、不知土人何以畏入乃爾！乃取行囊於前村、從將軍嶺出、隨澗北行。十餘里、抵大道。其處東向把七尚七里、西向還麻止三里、余初欲從把七附舟西行、至是反溯流逆上、既非所欲、又恐把七一時無舟、天色已霽、遂從陸路西向還麻。時日已下舂、尚未飯、索酒市中。又西十里、宿於黄（石）鋪、去茶陵西已四十里矣。是晩碧天如洗、月白霜淒、亦旅中異境、竟以行倦而臥。

黄石輔之南、即大嶺北峙之峯、其石嶙峋插空、西南一峯尤甚、名五鳳樓、〔去十里而近、即安仁道。〕余以早臥不及詢、明日登途、知之已無及矣。

〔黄石西北三十里爲高暑山、又有小暑山、俱在攸縣東、疑即司空山也。二山之西、高峯漸伏。茶陵江北曲、經高暑南麓而西、攸水在山北。是山界茶・攸兩江云。〕

■訳注の部

●訓訳

上清を去ること三里にして、麻葉洞を得。洞は麻葉灣に在り、西は大嶺たり、南は洪碧たり、東は雲陽と棗核の支たり、北は則ち棗核の西垂なり。

大嶺は東に轉じて、澗の下流を束ね、夾峙すること門の如し。而して門に當るの一峯に、聳石屼突たり、將軍嶺たり。澗は其の西を搗き、而して棗核の支も、西して此に至りて盡く。澗の西に石崖の南向せる有り、環すること展翅のごとし。東のかた澗中を瞰し、而して大嶺の支も、亦た東して此に至りて盡く。

廻崖るの下にも、亦た一隙を開く。淺くして入る能わず。

崖前に小溪有り、西よりして東し、崖前を經て大澗に入る。

小溪に循ひて崖の西脅の亂石の間に至る、水は下に窮まり、竅上に啓く、即ち麻葉洞なり。洞口は南向にして、大なること僅に斗の如く、石隙中の轉折すること數級の下に在り。

初め炬を覓め導を倩はんとす。、亦た俱に炬を以て應ずるも、而も敢へて導せんとする

者無し。曰く「此の中に神龍有り」と。或いは曰く「此の中に精怪有り。法術有る者に非ざれば、攝服せしむること能わず」と。最も後に重資を以て一人を覓ふ。將に衣を脱ぎて入らんとするに、「余は乃ち儒者にして、羽士に非ざる」を問ひ、復た驚き出して曰く「予以て大師と為す、故に隨ひ入らんと欲す。若し讀書人なれば、余豈に能く身を以て殉ぜんや」と。

余乃ち前村を過ぎ、行李を其の家に寄せ、顧僕と各々束炬を持ちて入る。

時に村民の隨ひて洞口に至るもの數十人。樵者は鎌を腰にし、耕者は鋤を荷ひ、婦の炊ぐ者は爨を停め、織者は杼を投じ、童子の牧者、行人の負載せる者、踵を接して至り、皆能く從ふ莫し。

余が兩人は乃ち足を以て先ず入り、級を歴し竇を轉じて、炬を遞へて下る。數轉して洞底に至る。洞は稍々寛にして、身を側し首を矯むるを以て、乃ち始めて炬を以て前に向ふべし。其の東西の裂隙は、俱に入る處無し。直北に穴有り、低は僅に一尺、闊も亦た之の如し。然れども其の下は甚だ燥にして平なり。乃ち先ず炬を以て入り、後に蛇伏して以て進む。背は磨し腰は貼す。身の後ろを以て聳し、乃ち此の内洞の第一關を度る。其の内は裂隙既に高く、東西も亦た横に亙る、然れども亦た入る處無し。又た第二關を度る。其の隘と低と前と一轍にして、進法も亦た之の如し。既に入れば、内層は亦た横裂す。西南に裂する者は甚しくは深からず。其の東北に裂する者は、上に一石坳あり、忽として又た縦裂して起つ。上は穹にして下は狹、高くして頂を見ず、此に至りて石の幻なる形を異にし、膚理頓に換(かは)る、片竅俱に靈なり。

其の西北の峽は、漸く入れば漸く束し、内に一縫を夾み、炬を容るる能わず。轉じて東南の峽に從ふ。仍りて一坳を下る。其の底は砂石平鋪たりて、澗底の潔溜せるものの如し。第だ乾燥して水無し。特だに揭厲を免るるのみならず、且つ沾污を免るるなり。峽の東南に盡くるの處は、亂石轟駕し、樓臺の層疊たる若し。其の隙よりすれば皆な攀躋して上るべし。其の上の石に竇一縷あり、直ちに洞頂に透す。光隙中より下射し、明星鉤月の若く、望むべくして摘むべからざるなり。層石の下は、澗底南に通ずるも、覆石低壓し、高さ僅かに尺許なり。此れ必ず前に洞外に通じ、澗の從ひ入るところの者なり。第だ昔は何を以て湧流し、今は何を以て枯洞たるかを知らざるなり、解すべからざるなり。

層石より下り、北のかた澗底に循ひて入る。其の隘なること甚だ低く、外の二關と相ひ似たり。稍や其の西に從ひ、一石の隙を攀して上る。北に轉じて東す。鞍を度り嶠を歴するが若し。兩壁の石質石色は、光瑩にして滴らんと欲す。垂柱は蓮を倒すがごとく、紋は鏤雕せるが若く、形は飛舞せんと欲す。東に一級を下れば、復た澗底に値(あ)ふ。已に轉じて隘關の内に入る。ここにおいて一衒を闢成す。闊さ二丈有り、高さ丈五有り、覆へる石の平らなること布幄の如く、澗底の坦なること周行の若し。北に馳せること半里にして、下に一石有り、庋出すること榻の如く、楞邊勻整たり。其の上は則ち蓮花下垂し、連絡して幃を成し、結して寶蓋を成す。四圍幔を垂れ、大なること榻と並ぶ。中は圓に透し、空に盤す。上は穹して頂と為る。其の後ろの西壁は、玉柱の圓なるもの豎す。或いは大にして或いは小、其の形を一にせざるも、而も色は皆な瑩白たりて、紋は皆な刻鏤たり。此れ衒中の第一奇なり。又た直ちに北に半里にして、洞上下兩層に分かれ、澗底は東北によりて去る。上洞は西北より登る。時に余　賚齎す所の火炬已に其の七を去る。歸途辨ずる莫きを恐れ、乃ち前道により數轉にして二隘關を穿ち、透光の處に抵る。炬恰(あたか)も盡く。竅を

穿して出づ。恍として脱胎して世を易ふるが若し。

洞外の守り視る者、又た數十人を增す。余が輩の皆(とも)に頂額するを見、異を稱し、以て大法術人と為す。且つ云ふ「前に久しく候つに、以爲(おもへ)らく、必ず異吻に墮ちん、と。故に余輩入らんと欲するも敢へてせず、去らんと欲するも能くせず。茲に安然として恙無し。神靈の攝服するに非ざれば、安んぞ能く此を得ん」と。余各々之を謝して、曰く「吾は吾の常を守る、吾は吾の勝を探るのみ。諸君の久しく佇ずむを煩はす、何を以て之を致さんや」と。

然りして其の洞は但だ入るの處は隘なること多きも、其の中は潔淨乾燥たり。余の見る所の洞、俱に能く及ぶ莫し。知らず、土人何を以て入るを畏るること乃(か)くなるのみ。

乃ち行囊を前村に取り、將軍嶺に從ひて出で、澗に隨ひて北行す。十餘里にして、大道に抵る。其の處は、東のかた把七に向かふこと尚ほ七里にして、西のかた還麻に向かふこと三里に止まる。余初めは把七に從ひて舟に附して西行せんと欲す。是に至るに、反って流れを溯りて逆上するは、既に欲する所に非ず。又た把七に一時に舟無きを恐る。天色已に霽る。遂に陸路に從ひて西のかた還麻に向かふ。時に日已に下春なり。尚ほ未だ飯せず、酒を市中に索む。又た西に十里にして、黄石鋪に宿す。茶陵を去ること西に已に四十里なり。是の晩、碧天洗ふが如く、月は白く霜は淒々たり。亦た旅中の異境なり。竟に行の倦むを以て臥す。

黄石輔の南は、即ち大嶺北峙の峯なり。其の石は嶙峋として空に插す。西南の一峯尤も甚しく、五鳳樓と名す。去ること十里にして近、即ち安仁の道なり。余早く臥するを以て詢ふに及ばず。明日途に登して、之を知るも已に及ぶ無きなり。

黄石の西北三十里は高暑山たり。又た小暑山有り、俱に攸縣の東に在り。疑ふらくは即ち司空山ならん。二山の西は、高峯漸く伏す。茶陵江の北曲は、高暑の南麓を經て西す。攸水は山の北に在り。是の山は茶・攸兩江を界すると云ふ。

●語注

○麻葉灣　湾は川の流れが湾曲したところ。
○斗　ひしゃく、あるいは井桁である枡形か。
○攝服　攝は懾（ショウ）に通じる。おそれて屈服する。
○羽士　羽があり空を飛べる仙人道士。
○讀書人　儒者のこと。
○以身後聳　黄珅は「下半身を前にして進める（足を先にして体を寝かせて進む？）」、任国瑞は「下半身を後に向かって高くして（腰のあたりを高くして尺取り虫のように？）」と訳す。いずれも意訳であろう。任に近い訳とした。
○揭厲　揭は衣を揭げて川を渡る、厲は服を着たまま川を渡る。
○可望而不可摘　直訳すれば「見えるけれども手に取ることはできない」となるが、「手で摘むことができるのではないか、と錯覚するほどありありと見える」ということであろう。
○衕　巷に同じ。路地、小路。あるいは小さなエリアか。
○周行　大道。
○賚　齎の略字。もたらす、携える。

○頂額稱異　頂額は額（ひたい）。黄珅は「以手加額、表示慶幸」と注し、任国瑞は「将手挙到額頭行了礼」と訳す。
○溯流逆上　現代地図等から確認できることでは、把七から攸県への舟行は流れに沿うものである。徐霞客は誤解をしているのか。
○下舂　ひぐれ。
○黄石鋪　「長沙」図に見え、大地図に「黄石衝」が見える。
○嶙峋　切り立って突き出た様。

●口語訳

《13》麻葉洞探訪

●周辺の地形

上清洞から三里で、麻葉洞である。洞は麻葉湾にある。湾の西は大嶺で、南は洪碧山で、東は雲陽山と棗核嶺の支脈で、北は棗核嶺の西の端である。

大嶺は東に転じて、渓流の下流部分を狭くし、門のように両側から聳えたつ。そして門に相当する峯のひとつに、石が崖のように高くそびえ立っている。これが將軍嶺である。渓流はその將軍嶺の西側に突き当たっているが、棗核嶺の支脈も西に進んでここで尽きている。渓流の西に南向きの石の崖がある。鳥が翼を広げたように渓流を囲んでいる。東の方に渓流の中程を見下ろしている。大嶺の支脈も、東に進んでここで尽きている。

めぐる崖の下にも、洞穴が口を開けているが、浅くて入れない。

石崖の前に小渓があり、西から東に流れ、石崖の前を経由して大澗に入っている。

●案内人確保の困難

小渓に沿って進み、崖の西側の石が乱雑に林立している所に来た。小渓の水は崖の下に消えてゆき、穴が上向きに口を開けている。これこそ麻葉洞である。洞口は南向きで、大きさはわずかに一斗くらいで、林石中何段か下った石階段の下にあった。

最初に松明を求め引導者を雇おうとした。すると松明については皆提供してくれたが、引導しようとするものは全くいなかった。彼らが言うには「この洞穴の中には神龍がいる」と。またあるものは「この穴の中には神霊怪異がいる。法術を身につけたものでなければ、それを恐れさせ屈服させることはできないのだ」と。それでも最後には謝金を積んで一人を雇うことができた。ところがいざ衣を脱いで洞穴に入ろうとする段になって、そのものとのやりとりの中で「私は儒者であり道士ではない」ことが明らかになった。すると彼は驚いて言う「私はあなたが法力のある道士だと思っておりました。だからあなたと一緒に洞穴に入ろうと思ったのです。あなたが法力など無いただの儒者だとするならば、どうして私は命を捧げてあなたに同行することができるでしょうか。いやできません」と。

●案内人を断念

そこで私は、前に通過した村に戻り、荷物をその家に預けて、顧僕とふたり、松明の束を持って洞穴に入ることにした。

その時に村民で洞口に集まってくるものが数十人いた。樵夫は鎌を腰にさげ、農民は鋤を肩にかつぎ、食事の支度をしていた婦人は調理を停止し、機を織るものは杼をほったらかしにし、牧童や行商人も足の踏み場もないほど集まってきたが、私たちに就いてきて洞穴に入ろうとするものは一人もいなかった。

●入洞

我々ふたりは、まず足から入り、石段を踏み、穴を廻り、松明を持って下る。何度か廻って洞底に至る。そこで洞はやや広くなっている。体を斜めにし、首をすくめ、そこで初めて前に松明を掲げて進むことができる。東西に避けている隙間は、全く入れそうなところがない。ま北にさらに一穴がある。高低は僅に一尺で、広さも同じくらい。そうではあるが、穴の底辺部分は全く乾燥していて平らかである。そこで先ず松明を差し込み、次に我が身を蛇伏させて進入する。背中は洞頂をこすり、腰も地面をはう。下半身を少し高くし、尺取り虫のようにしながら、やっとこの内洞の第一関門を通過する。

その内側に出ると、裂け目の高低は更に高くなり、東西に貫通していたが、そこから更に入るところが無い。さらに第二関門を通過する。その狭さと高低は前の関門と同じで、進む方法もまた同じである。

第二関門に入ってみると、内層が横様に裂けている。その西南に裂けるものはそれほどは深くない。東北に裂けるものは、上部に陥没した石があり、忽然として縦に裂け目がをなして起立している。その上部は湾曲しており、下部は狭くなっている。石の背が高いので頂上部分は見えない。この場所に至って、玄妙な形の異なる石があり、岩肌の紋様もめまぐるしく変わっており、一片の石、ひとつの竅ごとに、霊妙さを感じさせる。

西北に伸びる峡道は、入るに従いだんだんと狭まってゆき、最後には一筋の縫い目ほどになり、松明を差し込むことすらできなくなった。そこで転じて東南に伸びる峡道を選択する。

そのままひとつのくぼみを下る。その底部は砂石が覆っている平らなところで、潔浄でなめらかな渓流の河底のようである。ただここは乾燥していて水は無い。だから、水を渡るために衣を掲げようかそのまま渡ろうかと悩む必要がないだけではなく、衣服や体が濡れたり汚れたりすることからも免れるのである。

峡道の東南での行き止まりには、乱れる石がたくさん重なっており、層疊をなす楼台のようである。石の隙間に手をかければ、よじ登ることができそうである。上部の石の表面に一筋の穴が開いていて、まっすぐ洞穴の頂上部にまで伸びている。光がその隙間から下り射し、明星や三日月のようで、眺めることはできるが、手に取ることはできない（まるで手で摘むことができるかのようである）。

積み重なった石の下からは、渓流の河底が南に通じているが、覆い隠す石が圧力を掛けて低くしており、高さは僅か一尺くらいになっている。この河底はおそらく前に見た洞外に通じており、渓流が流れ込むところのものであろう。ただ、昔は湧流していたのが、今はなぜ枯洞になっているのかは分からない、理解できないことだ。

層をなす石のところから下り、北の方へ澗底に沿って中に入る。狭い入口はとても低く、これまで通った二つの関所と同程度である。やや西よりのルートを取り、石の隙間に手を掛けてよじ登る。北に転じ、さらに東へ進む。馬の鞍を乗り越え、嶠（尖って高い山）を踏み越えるような感じだ。両側の壁の石の質や色について言えば、光り輝いており、水滴がしたたり落ちるかのようだ。石柱が蓮の花を逆さまにしたかのように上から下に下がっており、雕琢を施したかのような紋様が走り、飛び舞うかのような躍動的な形をなしている。東に一段下れば、ふたたび河底にであう。さらに転じて狭い関所の内側に入る。

●二次生成物

ここはひとつのミニ空間を形成している。広さが二丈、高さが一丈半あり、カーテンが覆ったような平らな石があり、河底が大道のように平たく広くなっている。ここから北に半里いくと、下に石がひとつある。榻（ベッド）が置いてあるかのようで、楞（角）と辺（へり）が整然としている。ベッドの上には鍾乳石が蓮の花のように垂れ下がり、隣とつながってカーテン上をなし、結びついては宝石箱の蓋のような形を形成している。四周に幔幕が垂れ、その覆う範囲はベッドと対応している。幔幕の中程は円形に透かしており、上へ向かって広がり、最上部はアーチ型をなして天井となる。幔幕の後ろの西側の壁には、円形の玉柱がすっくと立っている。その円柱は大きいものから小さいものまで形は多様であるが、色は皆白く輝いていて、刻み込んだような紋様が表面を被っている。これこそこのミニ空間における第一の奇勝である。

●引き返す

ここからさらに真っ直ぐ北に半里に至って、洞穴は上下二層に分かれており、下層にあたる河底は東北の方角へ進んでいる。上層の洞穴は西北に上昇している。その時、私が携帯してきた松明は、七割ほどを使用していた。帰途で松明が尽き道を判別できなくなるかもしれないと考え（、ここで引き返すことにする。）た。そこで往路をたどり、幾たびか角を曲がってふたつの関所を通過し、光がさしかかっているところに至った。そこでちょうど松明が尽きた。狭い洞口から外へ出た。まるで生まれ変わって再び世に出てきたかのようなここちがした。

●洞外の村人達

洞穴の外で見守っているものたちが、さらに数十人増えていた。我々二人が挨拶をしながら出てきたのを見て、不思議なことだと称し、かつこう言った「前から長い時間待っていたわけだが、あなた方はきっと怪物の口に呑まれてしまうだろうと考えていたのです。だから我々は洞穴に入ろうと思ったもののそうすることができず、かといってあなた方を見捨てて立ち去ることもできませんでした。ところがいま、あなたがたは安全であって無事でした。神霊の助けが無かったならば、どうしてこのようなことができたでしょうか」と。私は人々に一一感謝の念を示し、かつこう言った「私は私の道を守って行動するだけです。私は私が探求したい景勝を探求するだけなのです。しかし、あなたがたが長い時間私たちを待っててくれるという労をかけたことについて、どうやって敬意と謝意をお伝えしたらよいのか分からないほどです（心から感謝しています）」と。

そのように応えたのだが、この洞穴は入口こそとても狭いものの、その中は清らかで乾燥している。私がこれまで実地で探索した洞穴の中で、この洞穴に及ぶものはない（この洞穴は最高だ）。それなのに、土地の人々がなにゆえに、かくも入洞することを恐れるのか、さっぱり分からない。

《14》麻葉洞を出て衡山県へ

そこで荷物を前村に取りに行き、將軍嶺をたどって出発し、渓流に沿って北に進む。十里あまりで、大道に出た。この場所は、東の方へは把七までさらに七里で、西の方では還麻までで三里しかない。私は初めは把七に道を取り、舟に乗って西へ向かおうと考えていた。しかし、この地点で考えてみるに、把七からの舟行は流れを遡及する逆行になり、望ましいことではないと思った。また把七にいつでも舟があるとは限らないことも考えた。空もいい天気になった。そこでついに陸路を取り、西の還麻に向うこととした。時に太陽

はすでに傾いていた。まだ御飯（昼食？）を取っていなかったが、（還麻の？）市場で酒を買って飲んだ。

●黄石鋪で泊

さらにまた西に十里で、黄石鋪に宿泊する。ここは茶陵から西に四十里にもなる。

この晩、空は洗ったかのように碧暗く、月は白く輝き霜が寒々しく空気中を満たしている。これぞ、旅先における奇異なる光景である。昼間の行程の疲労から、すぐに寝てしまった。

●黄石鋪あたりの地形概観

黄石輔の南には、大嶺と北に対峙している峯がある。その石は切り立って突き出ていて、空に刺さっているかのようである。西南の一峯が最も突き出していて、五鳳楼と呼ばれている。そこから十里あまりで、安仁に通じる道に出る。

私はこの日、さっさと寝てしまって、この山のことを尋ねなかった。翌日、出発してからこのことを聞いたが、もはや引き返して五鳳楼に行くことはできなくなっていた。

黄石輔の西北三十里に高暑山がある。他に小暑山というものもある。どちらも攸県の東にあたる。おそらくここが司空山なのであろう。高・小暑の二山の西では、高い峯が次第に低くなっている。茶陵江の川筋が北にカーブをしており、高暑山の南麓を経由して西に流れる。攸水という川が高暑山の北を流れている。この山は、茶陵江と攸水とを区切るものになっていると言われる。

［一月十八日］

《概要》西北へ陸行。珠璣鋪を経て攸県域に入る。攸県城南関に至り、泊。茶陵江と攸水との流れを記述している。

■本文の部

十八日

晨餐後、自黄石鋪西行、霜花滿地、旭日澄空。十里爲丁塘鋪、又十里、爲珠璣鋪、則攸縣界矣。又西北十里、斑竹鋪。又西北十里、長春鋪。又十里、北度大江、即攸縣之南關矣。縣城瀕江北岸、東西兩門、與南門並列於江側。茶陵之江北曲西廻、攸水自安福封侯山西流南轉、俱夾高暑山而下、合於縣城東、由城南西去。是日一路霽甚、至長春鋪、陰雲復合。抵城纔過午、候舟不得、遂宿學門前。［亦南門。］

■訳注の部

●訓訳

十八日

晨餐の後、黄石鋪より西行す。霜花地に滿ち、旭日澄空なり。十里にして丁塘鋪たり。又た十里にして、珠璣鋪たり。則ち攸縣の界なり。

又た西北に十里にして、斑竹鋪たり。又た西北に十里にして、長春鋪たり。又た十里にして、北のかた大江を度れば、即ち攸縣の南關なり。

縣城は江に瀕するの北岸にして、東西兩門、南門と並びて江の側に列す。茶陵の江は北に曲りて西に廻り、攸水は安福封侯山より西流南轉し、俱に高暑山を夾みて下り、縣城の東に合し、城の南西よりして去る。

是の日一路霽るること甚し。長春鋪に至るに、陰雲復た合す。城に至るに纔に午を過ぐ。舟を候つも得ず、遂に學門前に宿す。［亦た南門なり。］

●語注

○了塘鋪　譚民政は、今の六塘鋪（or 緑堂鋪）がここでは、という（五九頁）。小地図①に「廖塘鋪」が見える。

○珠璣鋪　小地図②に「珠磯鋪」が見える。

○東西兩門、南門　攸県城は川沿いに東西に長く、南北に短い。そこで南門のみならず、城東のはずれの東門と城西のはずれの西門も川に面して門口を開けている。

○安福　江西省吉安府の県。攸水の水源は、武功山である。

○学門前　譚民政は、今の合門前がここでは、という（六八頁）。

●口語訳

［十八日］

●黄石鋪から珠璣鋪へ

朝食の後、黄石鋪から西行する。花が咲いているような霜が大地に満ちており、澄み切った青空に太陽が輝いている。十里で了塘鋪である。さらに十里で、珠璣鋪である。ここが茶陵県と攸県との境である。

［長沙府茶陵州域から攸県域に入る］

●攸県城へ

さらに西北に十里で、斑竹鋪である。さらに西北に十里で、長春鋪である。さらに十里で、大江を北に渡ると、攸県の南門である。

攸県の県城は川の北岸にあり、東西の両門と南門とが川沿いに並んでいる。茶陵から流れてきた川は北に曲ったのちに西に廻り、攸水は安福の封侯山より西に流れ、さらに南に転じて流れる。このふたつの川はともに高暑山を挟んで下り、攸県城の東で合流し、県城の南西を流れて去る。

この日は、ずっととても晴れていたが、長春鋪に至るころには、雲が空を覆ってきた。攸県城に至ったのは、お昼を少し過ぎたころだった。ここからの船便を工面しようとしたが得られず、結局学校の門の前の宿に宿泊することとした。［自注1］

［自注1］南門である。

［一月十九日］

《概要》西南へ陸行。県境の漠田を経て、衡州府衡山県域に入る。大江北岸の太平寺で船中泊。

■本文の部

十九日

晨餐後、陰霾不散。由攸縣西門轉北、遂西北登陟陂陀。十里、水澗橋、有小水自北而南。越橋而西、連上二嶺、其西嶺名黄山。下嶺共五里、爲黄山橋、有水亦自北而南、其水較大於水澗、而平洋亦大開。西行平疇三里、上牛頭山。又山上行二里、曰長崗冲、下嶺爲清江橋。橋東赤崖如廻翃、澗從北來、大與黄山橋等。橋西開洋、大亦如黄山橋、但四圍皆山、不若黄山洋南北一望無際也。洋中平疇、村落相望、名漠田。又五里、西入山峽、已爲衡山縣界。界北諸山皆出煤、攸人用煤不用柴、鄉人爭輸入市、不絶於路。入山、沿小溪西上、路分兩歧：西北乃入山向衡小路、西南乃往太平等附舟路。於是遵西南、五里爲荷葉塘。越盼兒嶺、五里至龍王橋。橋下水北自小源嶺來、南向而去、其居民蕭姓、亦大族也。北望二十里外、小源嶺之上、有高山屏列、名曰大嶺山、乃北通湘潭道。過橋、西南行三里、上長嶺。又西下一塢、三里、上葉公坳。又四里、下太平寺嶺、則大江在其下矣。隔江即爲芒洲、其地自攸縣東四十五里。是日上長嶺、日少開、中夜雨聲滴瀝、達明而止。

■訳注の部

●訓訳

十九日

晨餐の後、陰霾散らず。

攸縣の西門より北に轉ず。遂に西北して陂陀を登陟す。十里にして、水澗橋なり。小水の北よりして南する有り。橋を越えて西し、連(しき)りに二嶺を上る。其の西の嶺は黄山と名す。嶺を下り共に五里にして、黄山橋たり。水の亦た北よりして南する有り。其の水や水澗より較々大にして、平洋も亦た大いに開く。西に平疇を行くこと三里にして、牛頭山に上る。又た山上を行くこと二里にして、長崗冲と曰ふ。嶺を下れば清江橋たり。橋の東の赤崖は廻翃の如し。澗の北より來るあり、大なること黄山橋と等し。橋の西は開洋にして、大なること亦た黄山橋の如し。但だ四圍皆山にして、黄山の洋の南北一望して際無きには若かざるなり。洋中に平疇ありて、村落相望む。漠田と名す。又た五里にして、西のかた山峽に入る。已に衡山縣の界たり。

界北の諸山は皆煤を出だす。攸人は煤を用ひ柴を用ひず。鄉人の爭ひて輸(おく)りて市に入るもの、路に絶えず。山に入り、小溪に沿ひて西に上る。路兩歧に分かる。西北は乃ち山に入りて衡に向かふの小路にして、西南は乃ち太平等に往きて舟に附すの路なり。ここにおいて西南に遵ふ。五里にして荷葉塘たり。盼兒嶺を越え、五里にして龍王橋に至る。橋下の水は北のかた小源嶺より來り、南に向ひて去る。其の居民は蕭姓、亦た大族なり。北に望むこと二十里の外、小源嶺の上に、高山の屏列する有り。名を大嶺山と曰ふ。乃ち北のかた湘潭に通ずるの道なり。橋を過ぎ、西南に行くこと三里にして、長嶺を上る。又た西に下りて一塢あり。三里にして、葉公坳を上る。又た四里にして、太平寺の嶺を下る。則ち大江其の下に在り。江を隔つるは芒洲たり。其の地は攸縣の東より四十五里なり。是の日、長嶺に上るに、日少しく開く。中夜に雨聲滴瀝として、明に達して止む。

●語注

○陰霾　大気中に土砂の微粒子が大量にうかび空気が濁る現象。つちぐもり。

○水澗橋　譚民政は、いまの水金橋がここでは、という（七一頁）。「攸県」図に「水金橋」が見える。
○有小水自北而南　これがのちにいう「水澗」であろう。
○黄山橋　譚民政は、いまの黄双橋がここでは、という（七二頁）。大地図、「攸県」図に「黄双橋」が見えるか。
○平洋　洋は、広大であること。黄珅は、開闢した平地と注す。
○牛頭山　譚民政は、すでに山はないが牛頭湖があるという（七二頁）。「攸県」図に「牛頭湖」が見える。
○清江橋　譚民政は、同名の橋がいまなお存するという（七三頁）。大地図・小地図②にあり、「攸県」図に見える。攸県から清江橋を経由するルートは、洣水から北へ遠く離れており、「考察図集」が洣水沿いに想定するものとはかけ離れている。
○漠田　譚民政は、いまの睦田がここでは、という（七三頁）。
○太平等　太平寺の誤記か。
○荷葉塘　「南灣」図に見える。譚民政は、いまの衡東県高湖鎮偉田村がここでは、という（七七頁）。
○龍王橋　譚民政は、高湖鎮東升村に同名の橋があるという（七八頁）。「南灣」図に見える。
○太平寺、芒洲　「南灣」図には「考察図集」が記す位置よりもかなり下流に「太平寺」が見える。洣水の右岸である。江を隔てているのは灣頭洲であり、芒洲は、太平寺と同じ洣水右岸である。ただし、北上する洣水が左（西）に九十度湾曲する先にあり、太平寺から川を隔てていると言えなくはない。
○其地自攸縣東四十五里　芒洲は攸県の西に位置する。あるいは「東」は「西」の誤りかもしれない。

●口語訳

［十九日］

●攸県城から衡山県域まで

朝食の後、大気中のつちぐもりが散らずに漂っている。

攸県の西門から北に道を転じる。西北に進み坂道を上る。十里で、水澗橋である。北から南に流れてくる小川がある。橋を越えて西に進み、ふたつの嶺を続けて越える。その西側の嶺を黄山という。嶺をくだって五里で、黄山橋である。ここでも北から南に流れてくる小川がある。その川は先の水澗橋の川よりもやや大きく、平野も大いに開けている。西の方へ田畑を三里行き、牛頭山に上る。さらに山上を二里行くと、長崗冲と言う場所である。嶺を下ると清江橋である。橋の東岸は赤い崖が鳥が翼を広げたように展開している。ここでも北から流れてくる小川があり、その大きさは黄山橋をくぐる小川と同じくらいである。橋の西は平野が開けていて、その規模も黄山橋の西に開けたものと同じであえる。ただ、この場所は四方が山に囲まれており（展望が悪く）、黄山橋での南北に果てしなく展望できたものには及ばない。平野の中に平らな田畑があり、村落が遙かに見える。ここは漠田と言う。さらに五里で、西に山峽に入る。ここはすでに衡山県の境域である。

［長沙府攸県域から衡州府衡山県域に入る］

●龍王橋などを経由して太平寺へ

県境の北の諸山はどれも石炭を産出する。攸県の人々は石炭を燃料として用い、柴は用いない。攸県の人々は争うようにして石炭を市場に運び、路に運搬人が絶えない。

山に入り、小谷川に沿って、西に上る。路が二股になっている。西北の道はそのまま山に入って衡山へ向かう小路で、西南の道は太平寺に行って、そこから舟を利用する道である。ここでは西南の道を選択する。

五里で荷葉塘である。盼兒嶺を越え、五里で龍王橋に至る。橋下の水は北の小源嶺から流れ来たり、南に向って流れ去る。（龍王橋のある）村落の居民は蕭という姓で、大族である。北に望むこと二十里に、小源嶺の上に、高山が屏列しているものがある。名を大嶺山と言う。これこそ北のかた湘潭に通じる道である。

橋を過ぎ、西南に行くこと三里で、長嶺を上る。さらに西に下ると窪地がある。三里すすみ、葉公坳を上る。さらに四里で、太平寺の嶺を下る。ここでは大江がその下を流れている。江を隔てた向こう岸は芒洲である。この太平寺は攸県城東部から四十五里にあたる。

この日、長嶺を上っているころは、日が少し差していた。真夜中にしたたり落ちる雨の音が聞こえ、明け方にようやく止んだ。

［一月二十日］

《概要》太平寺から舟行。洙水を遡上。下埠を経て、楊子坪に泊。七十里を一日で進む。途中、廻郷灘などの難所がある。

■本文の部

二十日

先晩候舟太平寺涯上、即宿泊舟間。中夜見東西兩山、火光熒熒、如懸燈百尺樓上、光焰映空、疑月之升日之墜者。既而知爲夜燒。既臥、聞雨聲滴瀝、達旦乃止。上午得舟、遂順流西北向山峽行。二十五里、大鵝灘。十五里、過下埠、下廻郷灘、險甚。過此山始開、江乃西向。行二十五里、北下横道灘、又十五里、暮宿於楊子坪之民舍。

■訳注の部

●訓訳

二十日

先晩、舟を太平寺の涯上に候つ。即に泊せる舟間に宿す。中夜、東西兩山に、火光の熒熒たること、燈を百尺の樓上に懸くるが如きを見る。光焰空に映じ、月の升れるか、日の墜つる者かと疑ふ。既にして知る、夜燒たるを。既に臥し、聞聲の滴瀝たるを聞く、旦に達して乃ち止む。上午に舟を得、遂に流れに順ひて西北に山峽に向かひて行く。二十五里にして、大鵝灘たり。十五里にして、下埠を過ぐ。廻郷灘を下る、險なること甚し。此を過ぎて山始めて開く。江乃ち西に向かふ。行くこと二十五里にして、北へ横道灘を下る。又た十五里にして、暮に楊子坪の民舍に宿す。

●**語注**

○舟　舟行は、洙水である。この川は衡東県の西で湘江に合流する。

○聞雨聲滴瀝、達旦乃止　この句、前日条と重複する。

○大鵝灘　譚民政は、いまの大岳灘がここでは、という（八三頁）。

○下埠　「長沙」図、十「衡山県」図に見える。いまの夏浦であろう。夏浦は、「南灣」図、大・小地図①にあり。

○廻郷灘　譚民政は、いまの廻水灘がここでは、という（八四頁）。

○楊子坪　譚民政は、いまの楊梓坪がここでは、という（八四頁）。十「衡山県」図では楊子坪が、「呉集」図では楊梓坪が見える。

●**口語訳**

［二十日］

●**前夜の回想**

先晩、太平寺の水辺で舟を待っていた（が得られない）。そこで停泊している舟に宿を取った。夜半に、東西の山に、火の光があかあかと輝き、まるで百尺もの楼閣の上に提灯をつるしたかのようなありさまだった。光焔が空を照らし、月が上ったか、太陽が落ちてきたかのような感じがした。そのあと、山焼きだと聞かされた。寝床に伏せったのちに、したたり落ちる雨の音が聞こえ、明け方にようやく止んだ。

●**太平寺から楊子坪へ：舟航**

午前に（ようやく）舟便を得、流れにそって西北方向に山峡を通って進む。二十五里で、大鵝灘である。十五里で、下埠を通過する。廻郷灘を下る、とても険阻である。ここを過ぎると山峡が始めて開け、川は真西に向かう。行くこと二十五里で、北へ向きを変え横道灘を下る。さらに十五里にして、暮になり楊子坪の民家に宿を取る。

（第二部へ続く）

訳注：薄井俊二、二〇二五年二月二十五日